新古改撰誌記　　巻之一

（朱書）
「一」
寛政九巳年
（朱書）
「御小人頭」浅見十郎左衛門組高田利右衛門今日八ツ時揃ニ而御吟味有之候、然ル処只今迄羽織袴或者麻上下ニ而罷出区々ニ候間、麻上下着せ差出候様村上肥後守被申達候旨久蔵殿被仰渡候ニ付、則利右衛門儀麻上下着せ差出候様十郎左衛門より申渡候、尤直ニ麻上下牢屋江遣候様是又久蔵殿御申渡、右ニ付以来者右躰之儀有之節者麻上下着せ差出候様可仕哉之旨十郎左衛門より久蔵殿江相伺候処、其通り相心得候様被仰聞候、左候ハヽ、五役一統右之通相心得可申哉之旨相伺候処、以来五役一統其通り相心得候様被仰聞候旨十郎左衛門被申聞候

巳八月廿二日

（朱書）
「二」
寛政十午年

元御中間頭
三浦弥五左衛門組之節
山本良左衛門
午四十七歳
当時吉右衛門与改名仕候

当時触番役
相勤罷在候

御奉公年数弐拾壱年

右吉右衛門儀先達而御中間組頭見習相勤罷在候処、寛政二戊年二月十九日組頭見習差免平役可申渡旨、間宮諸左衛門殿御宅ニ而被仰渡候、吉右衛門儀其後慎出情相勤候に付可相成儀ニ御坐候ハヽ、此節御中間方御門番人江相伺申度奉存候、尤年数も相立候得共前書之通被仰渡候者ニ御座候間、此段御内意奉伺候、以上

午七月　　御中間頭
浅岡平八郎

右書面午七月十九日左京殿江差出候処、同八月廿七日御一同御評議相済思召無之候間、以来之義慎候様可申渡候、尤相応之場所江書出候様左京殿被仰渡候

（朱書）
「三」
享和元酉年

書付を以御内々奉願候

一、私共当御番日々弐人宛詰切泊御番相勤申候、然ル処御台所無之候ニ付手弁当致用意勤来申候処、暑寒之節者用意之弁当用ニも相成不申甚難渋之節度々有之、其上明御番より　御成御供罷出、殊更　御成多ニも御座候得者別而難儀仕候間、何卒日々弐人宛朝夕御夜食共御台所被下置候様仕度奉存候、此段御願被下置候様

同役一同御願申上候、以上

酉十一月　　御中間押
　　御小人押

六組
御頭衆中様

覚

　　御中間押
　　御小人押

右両役ニ而当番泊り弐人宛相詰候処、前々より御台所不被下置銘々自分弁当持参仕罷出申候、然ル処右弁当用ひ方之儀暑寒共難渋仕候間、何卒御台所被下置候様此度相願申候間、難渋之訳相糺候処、暑中之節者持参之品翌朝甚風味悪敷相成明番ニ而難相用、寒中迚も明番ニ而至而冷候品相用ひ候儀難渋仕、殊ニ遠御成御供ニ罷出候節抔者別而凌兼候趣申聞、尤之儀ニ御座候間私共評議仕候処、一躰小給之者ニ而役米等も無御座多分困窮之躰ニ御座候ニ付、自分手弁当も行届不申難儀至極仕候義ニ御座候、依之何卒可相成御儀ニ御座候ハヽ、御小人目付・御使之者ニ准候儀ニ御座候間、右役々並之通御台所被下置候様仕度、此段私共一同偏ニ奉願候、以上

酉十一月　　御中間頭
　　御小人頭

右者酉十一月廿四日多宮殿江差出候処、同十二月廿四日願之通御台所被下候旨摂津守殿被仰渡候段、靭負殿御口上ニ而被仰渡候ニ付、詰合之御中間押・御小人押呼出申渡、尤今廿四日より御台所被下候旨も御口上ニ而被仰渡候事

（朱書）「四の上」

享和二戌年

本所菊川町御中間・御小人大縄地面裏之方下水端永御預除地幷小普請組彦坂九兵衛組竹田吉十郎屋敷境右除地囲込ニ相成有之候場所とも、此度御中間・御小人江引渡ニ付、昨十八日請取人幷立合之者差出候処、小田切土佐守組与力・同心、根岸肥前守組与力・同心罷越、御中間・御小人江引渡請取申候、依之申上候、以上

戌八月十九日　　御中間頭
　　御小人頭

右御当番金四郎殿江差出ス、尤御取扱孫右衛門殿・帯刀殿江ハ口上ニ而申上ル

（朱書）「四の下」

同年

戌九月朔日小島孫右衛門殿御尋ニ付、隼三郎を以差出

御中間大縄屋敷割余り等有之候得者、格坪より少き者抔江添地等足シ坪ニ預ケ遣候儀、又者御咎等ニ而上り屋敷ニ相成候分、但御抱入無屋敷之者江預遣候義、組之者依願凡而頭存寄を以申渡相伺候事無御座候、尤古来より之大縄地取扱候例格ニ而、右之通仕来御座候、以上

八月　　御中間頭

（朱書）
「五」
文化十酉年

宗旨証文　　御中間頭

一、切支丹宗門従前々無懈怠今以相改申候、先年被　仰出候御法度書之趣遂僉議候、御預組中幷私共家来至迄、切支丹紛敷者無御座候、依之銘々寺証文取置申候事

一、此以後組中幷私共家来等迄切支丹ニ怪敷者御座候者早々可申上候、為其仍如件

文化十癸酉年十月

御中間頭
末次佐吉　印　書判
大林条右衛門　印　書判
小島由右衛門　印　書判

水野若狭守殿
岩瀬加賀守殿

右程村紙ニ認上包美濃紙折掛ケ、年番加賀守日光在勤中ニ付若狭守殿江十月八日組頭次右衛門持参ス、左之通受取書差越ス、尤此方年番ニ候得共筆頭宛ニ而前々より請取書差出来候由ニ候事

宗門御改御証文　　壱通

右請取申候、以上

水野若狭守内
長井潤蔵　印

酉十月八日

小島由右衛門殿

右宗旨証文文言之儀、文化三寅年迄ハ自分家来共迄与認来候処、同四卯年伊藤河内守より達し有之、同年以来私家来共与認直し候事

（朱書）
「六」
享和三亥年六月役所江張出

一、第一「（火之元カ）」入念大切ニ可致事

一、博奕者勿論惣而賭物等一切停止之事
　附喧嘩口論堅相慎可申候事

一、役所江酒肴持参致間敷幷夜蕎麦売等猥ニ呼込申間敷候、乍併無拠子細有之候節者、格別其節者世話役之差図ニ任可申候事
　但昼之内も商人呼込欺なといたし、歴々仕候事決而致間敷候
　幷食類等買候而かけニ致し置、節句前等ニ成り候而も不払儀抔決而有之間敷候儀ニ者被存候得共、万一左様之筋有之候趣相聞候ハヽ、其者急度御咎可有之候

一、部屋住之者共銭持参致間敷候、無益之食類抔ニ遣捨役所之風儀も不宜候間、親共其旨相心得、聊たりとも子供ニ銭宛行差出申間敷候事

一、常々衣服其外聊奢りたる儀無之様心掛ケ可申候、畢竟奢りより物事不足ニ相成候間、万事質素ニ致し可申候、当時世上一統奢強上下之無差別、武家町人之無隔も金銀無有ニ随ひ身分不相応之事共致候風俗ニ付、其身も奢といふ事不知打過候、兎角分限を能弁可申候事、扨又日々当番之者寄合、人之噂或者無益之物語等致

し空日を送り不申様可致候、成丈人之益ニ成候事共心掛ケ可申候、附而者囲碁・将棋或者徘徊（俳諧）発句之類、又者細工等致候儀者不苦候

但他之もの出入堅停止之事

一、若年之者者成丈於役所も手透之節者手習・物読・算盤等心掛ケ可申候

但小給者細工等致取続相勤候事故、稽古事之余勢無之趣申立ニいたし候得共、敢而金銭を入候計りニ而も物事成就不致候間、只心ニていたし可申候

一、組役人罷越候節幷役所近辺之武家町人ニ不限、過分之失礼無之様心掛ケ可申候

右之条々堅相守可申候、古参之者者別而勤方出精いたし不行儀無之様心掛ケ可申候、古参之者不宜候得者新参之者自風儀押移り、一躰役所之風俗悪敷罷成候間能々心得可申候、身持宜者又者格別出精之者者可成丈申上候而、品ニ寄夫々賞罰も可有之事ニ候間、兼々其旨相心得罷在候様可致候

享和三亥年六月

掟

一、従前々被　仰出候御法度之趣堅相守可申候事

一、御奉公向無油断相勤、同役一和致し私之我意不相立、万端申合行届候様可心得事

一、火之元大切ニ可致事

一、惣而賭之諸勝負制禁之事

一、衣服其外万事分限ニ応し、聊奢たる儀無之節倹を用ひ、御奉公取続方専要ニ可心掛事

一、喧嘩口論者不及申、都而声高なる儀幷無益之雑談相慎可申候事

一、当番之節手軽成一分之弁当致用意候者勿論ニ候得共、此外酒肴等決而不可持参幷食物商人猥ニ役所江呼入申間敷候、乍併時刻等ニ寄不得止事節者世話役江承合、差図次第相心得、尤其都度々　代銭無相違相払、縦令壱銭たり共買掛ケ致間敷事

附部屋住之者鳥目致持参候儀別而可為無用、おのつから無益之品をも相求、又者食用等ニ遣捨風儀も不宜候間其趣相心得、当番之節鳥目致持参間敷事

一、役所近辺其外何レニ而も植有之候菓物類決而貪間敷幷触先ニおゐて何品たり共拾取候様成儀堅無用可致事

一、若年之者者猶更之儀、可成丈於役所も御用透之節者筆算其外益ニ相成候義精々心掛、空敷時日を送り申間敷事

一、組役人罷越候節者勿論、其外役所近辺之者江対候而も過失無之様可致候、御用外之もの役所内江入出禁止之事

右之趣可心得候、別而世話役・古役之者万端心を用、取締方行届候様可致候、是迄も等閑之筋有之間敷事ニ者候得共、猶又厚勘弁を加、新役幷若輩之者江無怠致教示可申候、古役等柔弱ニ候得者自ら其風儀を見習何事も軽卒ニ相成、万一他向より批判受候時者筆上之者者勿論一躰之廉恥与相成残念之次第ニ者無之哉、此等能々致分別、勤向を初常々身持不行作無之様一統相互ニ心附精勤可致候、尤所条之旨趣取用方其厚薄ニ応し新古之無差別、厳々賞罰之沙汰可有之候条急度相心得可申事

文化十四年五月

（朱書）
「七」
文化元子年
「（朱書）
以書付奉願候
一、此度二丸御広敷江女中被遣候ニ付、御同所御門番・裏締戸番共
大奥御台所前御門番・同裏締戸番より持切相勤可申旨被仰渡候
得共、両ケ所持切相勤候ニ者御人少ニ御座候間、新規二丸御広
敷御門番・同裏締戸番共被　仰付被下候様奉願候処、別段ニ者
難相成旨被仰渡奉畏候、左候ハヽ、何卒両御番所江増人三人宛被
仰付被下置候様奉願候、右ニ而打込相勤可申候、尤御差支之
儀無御座候
子四月　大奥御台所前　御門番」
同　裏締戸番
御三名
石川友一左衛門組
二丸御台所脇御長屋御門番
山本良助
同人組
定番之者
尾関要蔵
鈴木半十郎組
触番之者
山崎寅之助
石川友一左衛門組
定番之者
山本半兵衛
鈴木半十郎組
定番之者
岡田四郎作
吉沢源十郎
大奥御台所前
御門番過人
同裏締戸番
過人

右伺書分「（朱書）文化元」子四月十六日石川当番ニ而伊織殿江差出候処、
同月廿四日伺之通可申渡旨備中守殿より次（治カ）兵衛殿御立合、孫三郎
殿被仰渡候
（朱書）
「八」
文化元子年
覚
御中間頭
石川友一左衛門
右友一左衛門儀御掃除頭被　仰付候ニ付、追而跡役被　仰付候
迄私共申合明組支配仕候、依之申上候、以上
子十一月　御中間頭
松崎嘉藤太
鈴木半十郎
右壱通月番帯刀殿江子十一月　日差出ス、但今日御当番也
此御届御月番江差出候留相見候処、近頃御小人頭助右衛門転役
之節、子十月四日御当番周防守殿江、於西丸者御当番猪右衛門
殿江出候ニ付、詰合大斧幸右衛門江も問合候処、前々月番江出
候事も有之、御当番江出候事も有之候ニ付、新平病死之節者月
番・当番兼宇右衛門殿江差出候旨申聞候間、今日も右ニ准御当
番帯刀殿ニ付月番も帯刀殿故御同人江出、西丸者翌日嘉藤太よ
り月番六左衛門殿江出、依之此方ハ以来共月番もの与定候事
「（ミセケチ）
承合　家督方
樫田弥太郎
大塚伝蔵」

（朱書）「九」

文化二丑年

御中間無役之者押込之儀奉伺候書付

覚

拝領屋敷　湯島三組町　御目付支配無役　真壁忠左衛門

右忠左衛門拝領屋敷地借家守権六方より昨廿三日昼八時頃出火仕、類焼之者も御座候旨相届申候、依之右忠左衛門押込置候様可仕哉奉伺候、以上

丑二月廿四日　御中間頭

右御扣共弐通帯刀殿江差出ス、御附札左之通

「出火遠慮可被申渡候」

右能登守殿より御下ケ帯刀殿被仰渡候

（朱書）「拾」

文化二丑年

御中間大縄屋敷取戻之儀奉願候書付

覚

拝領町屋敷　本郷元町　七拾坪弐合　御勘定所　御普請役　塚田十三右衛門

右十三右衛門儀御扶持被　召放町屋敷上り地ニ相成申候、右者御中間大縄屋敷ニ御座候間、先格之通御中間組江御返し被下候様奉願候、以上

丑三月　御中間頭　三名

右御扣共三通

例書

右清四郎儀、享和三戌年六月大縄屋敷ニ付取戻之儀申上候処、同年七月廿五日願之通元組江御返シ被下候段兵部少輔殿被仰渡候　御台所番　村田清四郎

丑三月　御中間頭

（朱書）「拾壱」

文化二丑年

御台所断

一、御中間押　弐拾六人

内拾三人　御中間
拾三人　御小人

打込日々弐人宛勤番

一、奥表仕切土戸番　六人

内弐人　勤番
朝夕計

一、御広敷御門　拾弐人

内三人　御本丸
弐人　二ノ丸

一、同裏締戸番　拾弐人

内三人　御本丸
弐人　二ノ丸

一、御太鞁櫓下御門　九　人
内三人　勤番之内
壱人　御小人方
一、二丸御長屋御門　六　人
内弐人　勤番
一、同御台所脇御門　六　人
内弐人　勤番
一、野方御使　拾九人
内四人　御供扣昼計
残り　御用方
一、昼番御用方　拾七人
一、御持鑓役　拾八人
内六人　勤番昼計
一、御供組頭　五　人
内壱人　勤番昼計
都合百三拾六人
内六拾四人　日々勤番

支配向御台所被下候分当時定御断人数相記、席々幷朝夕夜之分認分ケ、不洩様書付可差出候、尤西丸向之分者相除可申事

五月　松平伊織
土屋帯刀

右寛政四五月取調候趣を以取調、増減等有之候ハヽ、其訳相認可被差出候

五月廿四日

丑六月六日五役一同伊織殿江差出下書

覚

一、御中間頭　壱人　夕計
一、御小人頭　壱人　同断
御中間方
一、御供組頭　壱人　夕計
一、野方御使之者　四人　夕計
一、奥表仕切土戸番　弐人　朝夕共
一、御太鞁櫓下土戸番　三人　朝夕夜共
但御中間・御小人打込
御広敷
一、奥御台所前御門番　三人　朝夕夜共
一、裏締戸番　三人　朝夕夜共
一、二ノ丸御広敷御門番　弐人　朝夕夜共　△
一、裏締戸番　弐人　朝夕夜共
下ケ札
△　此弐ケ所去子四月十七日より御台所被下置候
一、二之丸御長屋御門番　弐人　朝夕共
一、同御台所脇御長屋御門番　弐人　朝夕夜共
御小人方
一、御使組頭　壱人　朝夕夜共
一、御小人目付　八人　朝夕夜共　六十人　夕計
但御中間目付・御小人目付打込人数不同
一、御小人押　弐人　朝夕夜共
御中間押・御小人押打込
但享和元酉年十二月廿四日より御台所被下置候

一、御使之者　拾人　朝夕夜共
　　五拾七人　夕計
　但御中間・御小人打込人数不同
一、御草履取　朝夕夜共
一、御風呂屋口番　弐人　朝夕夜共
二ノ丸詰
一、御小人目付　弐人　朝夕夜共
　但御中間目付・御小人目付打込
同
一、御使之者　三人　朝夕夜共
同
一、塀重御門番　弐人　朝夕夜共
同
一、中之口番　弐人　朝夕夜共
御城内　御成御用
一、御供扣御使之者　六人　朝夕共
　右御台所定御断ニ而被下置候
一、御中間・御小人　弐拾人程
　右者御用ニ付　御城江罷出候節、御台所時分御座候得者席江罷出、前々より御台所頂戴仕候仕来ニ御座候、尤日々人数差定り候儀無御座候
　右之通御座候、以上
　　丑六月　御中間頭
　　御小人頭
　寛政四子年四月写
一、御中間頭四之間　夕　壱人
一、御小人頭　同断
御中間方
一、御供組頭　夕　壱人
一、野方御使之者　夕　四人
一、奥表仕切土戸番　朝　弐人　夕　弐人
一、御太鼓櫓下土戸番　朝　三人　夕　三人　夜　三人
御広敷廻り
一、奥御台所前御門番　朝　三人　夕　三人　夜　三人
同
一、裏締戸番　朝　三人　夕　三人　夜　三人
一、二丸御長屋御門番　朝　三人　夕　弐人　夜　弐人
同
一、御台所脇御長屋御門番　朝　弐人　夕　弐人　夜　弐人
御小人方
一、御使組頭　朝　壱人　夕　壱人　夜　壱人
一、御小人目付　朝　八人　夕　五十人迄人数不同　夜　八人
一、御使之者　朝　拾人　夕　五十七人迄人数不同　夜　拾人
一、御草履取　朝　壱人　夜　壱人
一、御風呂屋口番　朝　弐人　夕　弐人　夜　弐人

二ノ丸詰
一、御小人目付　朝　弐人　夕　弐人
　　夜　弐人
同
一、塀重御門番　朝　弐人　夕　弐人
　　夜　弐人
同
一、中之口番人　朝　弐人　夕　弐人
　　夜　弐人
御城内　御成御用
一、御供扣御使之者　朝　六人
　　夕　六人
右御台所定御断ニ而被下置候
一、御中間・御小人　弐拾人程
右者御用ニ付　御成罷出候節、御台所時分ニ御座候得者席江罷出、前々より御台所頂戴仕候仕来ニ候、尤日々人数差定り候義無御座候
右之通御座候、以上
子五月　御中間頭
　　御小人頭

御小人目付
拾　人
右者夕御台所定椀被下置候様仕度奉存候、尤御小人目付惣人数八拾六人ニ而、只今迄夕御台所定椀日々五拾人宛頂戴仕候処、先達而拾四人増人被　仰付都合百人ニ相成、人数も相増候義ニ御座候間、以来日々夕御台所六拾人定椀ニ被仰付被下置候様仕度奉存候、以上
六月　御徒目付組頭
　　岩田吉左衛門

御台所定椀調組頭佐兵衛より出　弐拾六人
一、御中間押
内拾三人　御中間
拾三人　御小人
打込日々弐人宛勤番　六　人
一、奥表仕切土戸番
内弐人　勤番　朝夕計　拾弐人
一、御広敷御門
内三人　御本丸
弐人　二ノ丸　拾弐人
一、同裏締戸番
内三人　御本丸
弐人　二ノ丸　九　人
一、御太鼓櫓下御門
内三人　勤番之内
壱人　御小人方　六　人
一、二ノ丸御長屋御門
内弐人　勤番　六　人
一、同御台所脇御門
内弐人　勤番　拾九人
一、野方御使
内四人　御供扣　昼計
残り　御用方　拾七人
一、昼番御用方　拾八人
一、御持鑓役

内六人　勤番　昼計

一、御供組頭　五人

内壱人　勤番　昼計

都合百三拾六人

内六拾四人　日々勤番

一、二ノ丸御広敷裏締戸　弐人

三度

一、二ノ丸奥御長屋御門　弐人

同断

右之通御座候、以上

（朱書）「拾弐」

文化二丑年

御中間押込伺　土屋長三郎

覚

鈴木半十郎組

御中間

早野平七

右平七従弟西丸御台所小間遣池野谷武右衛門儀、一昨十八日根岸肥前守御役宅江被呼出、一通御尋之上揚屋江被遣候、依之平七身分之儀如何可申渡哉奉伺候、以上

丑十一月廿日　御中間頭　鈴木半十郎

右清安を以当番長三郎殿江差出、尤御扣共弐通　即日御附札を以被仰渡候

「御目見遠慮之格可被申渡候」

右能登守殿より虎之助殿立合、長三郎殿被仰渡候

一、末之文言如何可申付哉之処、押込置可申哉之方可然旨清安申聞候、乍去覚太夫一件之節右之通之由申相済候得共、以後之見合之ため其訳記し置候事

覚

鈴木半十郎組

御中間

早野平七

右平七従弟西丸表御台所小間遣池野谷武右衛門儀、去ル十八日揚屋江被遣候に付、平七身分之儀奉伺候処　御目見遠慮之格被　仰付候、然ル処右池野谷武右衛門申口相分り、組合預ケニ相成候旨平七より届申聞候、依之此段申上候、以上

十一月廿三日　御中間頭　鈴木半十郎

右弐通御当番虎之助殿江差出、翌廿四日能登守殿御附札を以「御目見遠慮之格可被差免候」右次左衛門殿立合周防守殿被仰渡候事

（朱書）「拾三」

文化三寅年

去丑五月中御玄関番跡役之者羽織幷御中間・御小人跡抱相済候者江羽折（織）請取差遣申度旨、御連名を以願書帯刀殿江差出置候処、

御玄関番羽織之儀者当正月相済候得共、跡抱之者之羽織未相済候、然ル処此節拙者組浅沼利喜蔵御風呂屋口番ニ而自分羽織着相勤罷在候処、病気ニ付弟鉄次郎儀跡抱相願候処願之通被仰付候、依之右鉄次郎江羽織請取差遣申度旨、別紙書面を以今日伊織殿江猶又相伺候処、以来御役羽織着相勤候者之倅跡抱相済候節者是迄之通相心得、自分羽織ニ而相勤候者之倅跡抱被　仰付候ハヽ、羽織御断差出候様被仰渡候、依之各様江も御達申候旨御同人江申上候ニ付則御達申候、以来右之通御承知可被成候、去年中差出候書面幷此度差出候書面両様共御廻し申候、御一覧可被成候

四月廿四日　　長田八十五郎

鈴木半十郎様
志村十次郎様
小島由右衛門様

臨時御役羽織請取申度旨御内意奉伺候書付写

御本丸・西丸共御小人御玄関番黒加賀絹袷羽織着用仕候場所ニ御座候処、御玄関番明キ有之跡役被　仰付候節臨時ニ羽織為請取申度奉存候得共、前々より御玄関番ニ限り跡役之者羽織請取不申候、右御玄関番江御小人目付又者御小人押より被　仰付候得者、袷羽折着用仕候者ニ付定式之羽織請取候迄者前役之羽織相用候而も先ツハ宜御座候得共、定式之羽織迄も隔年ニ請取候得者間合も御座候、其外単羽織着仕候者、或者自分羽折ニ而相勤候場所より御玄関番被　仰付候得者、着用仕候羽織無御座候、依之向後御玄関番跡役之者江臨時ニ羽織為請取申度奉存候、右之外御使組頭・御小人目付・御小人押何も跡役被　仰付候得者、其都度々々臨時之羽織前々より請取申候

一、御中間・御小人組々明キ跡御座候得者、其組々ニ而出精相勤候者之倅共跡抱申上、願之通跡抱被仰渡候得者、単羽織着用為仕早速為相勤候得共、是又自分羽織ニ而相勤候者之倅抔者羽織無御座候間、跡抱被　仰付候者江向後臨時ニ羽織為請取申度奉存候、既ニ御支配無役之者より御中間・御小人江御入人被　仰付候得者、其都度々々臨時之羽織前々より請取申候

右弐ケ条之趣可相成御儀ニ御座候ハヽ是迄臨時羽織御断差出、請取候振合を以為受取申度奉願候、尤前文之趣先年より心付罷在候得共、任仕来其儘差置候旨申伝も御座候得共、去子年単羽織不足之儀御小人頭申上候ニ付、此段も両役一同御内意奉伺候、以上

丑五月　　御中間頭
御小人頭

下ケ札
本文御玄関番袷羽織之儀、当正月私組御小人内川領助御草履取より御玄関番被　仰付候処、自分羽織ニ而相勤候者ニ付其節猶又御内意土屋帯刀殿江相伺候処、袷羽織ニ而相勤候者より御玄関番被　仰付候ハヽ是迄之通相心得、単羽織幷自分羽織ニ而相勤候者より被　仰付候ハヽ、羽折御断差出候様御同人被仰渡候ニ付、同月十四日羽織御断御当番土屋長三郎殿江差出請取申候

寅四月　　御小人頭
長田八十五郎

御玄関番幷御小人跡抱相済候者、着用仕相勤候御役羽織之儀ニ付、別紙之趣去丑年五月中土屋帯刀殿江御内意奉伺候処、此度私組御小人浅沼利喜蔵儀御風呂屋口番相勤罷在候処、病気ニ付弟鉄次郎儀跡抱奉願、願之通被　仰付候、然ル処利喜蔵儀是迄自分羽織ニ而相勤候間、弟鉄次郎儀跡抱被　仰付候ニ付、臨時ニ御役羽織請取差遣申度奉存候、依之御内意奉伺候、以上

寅四月　　御小人頭　長田八十五郎

下ケ札
「書面御内意伺之趣、単羽織着仕相勤候者之倅者是迄之通相心得、自分羽織幷袷羽織着仕候者之倅跡抱被　仰付候ハヽ、羽織御断差出可申旨被仰渡奉承知候、此段御中間頭江も相達可申候」

四月廿四日　　御小人頭　長田八十五郎

（朱書）「拾四」

文化三寅年

奉願候覚

御本丸御中間目付明キ御座候節々西丸御組之同役共之内右明キ跡奉願度段私共迄申聞候者度々御座候、何卒操上被　仰付被下置候得者格別御奉公出精之励ニも相成候間、依之此段奉願候、以上

西丸御中間目付
御小人目付

寅五月　　世話役　川野弥五郎　井上甚内　洞　金助

五月廿三日川野弥五郎差出候願書之写御小人頭申合、大助殿・伊織殿江申上候処御承知ニ付、以来明キ有之節西丸よりも御撰之内江名面書加差出候様被仰渡候

（朱書）「拾五」

文化三寅年

「御目付衆　　御納戸頭
毎暮御駕籠之者・御中間・御小人方江相渡り候無紋熨斗目・文島之儀者壱ケ年者御品渡り、壱ケ年者代金渡り之積、隔年取替相渡し候而も御差支之儀無之哉、御下札ニ而被仰聞候様いたし度及御懸合候、以上

十一月　　御納戸頭

本文之通御金渡ニ相成候得者裏表綿代金共

御金渡り之節
壱人分ニ付
金弐両三分弐朱　　文島渡り之方

同断
金弐両壱分弐朱　　熨斗目渡り之方

右書面伊織殿より野中新三郎を以内々御尋有之候ニ付、三役評議之上是迄之通御品渡りニいたし度旨口上ニ而及挨拶候、尤代金渡りニ相成候得者差支之趣ハ新三郎江直談物語いたし、書面相返し候事

（朱書）
「拾六」
文化四卯年
四役之者厄介之内より同場所江新規御抱入被　仰付候節者屋敷被下候哉、大縄屋敷等明有之候節右屋敷被下候哉、又者身寄之仲ケ間江同居ニ而別々屋敷者不被下候哉之事
「御書面之通屋敷願申上候得者屋敷被下置候、大縄屋敷之内明等有之候得者預遣候義も有之候、尤身寄之仲ケ間ニ同居之儀も勝手次第、屋敷願候得者被下候義御座候
四月　四役頭
卯四月廿四日右書面与市殿御渡ニ付大久保元次郎より達ス、右下ケ札ニ而返ス

（朱書）
「拾七」
文化四卯年
「御目付衆　西郷斎宮
各様御支配御中間頭鈴木半十郎方組岡田四郎作儀、拙者組津田平次郎家来江由緒之者有之候ニ付、平次郎屋敷之内明長屋家作共貸置申度旨平次郎より申聞候、各様江も半十郎方より申出相違も無之候ハヽ、御同様承置可申与奉存候、依之及御掛合候否御下ケ札ニ而被仰聞可被下候、以上
十一月
下ケ札
「御書面岡田四郎作儀、津田平次郎屋敷内明長屋家作借り申度旨申出候得共、別ニ入口等有之候得者格別左も無之候得者、日々出方夜中触申遣候事故、屋敷内ニ而者難相成旨申渡候義ニ御座候
十一月　御中間頭　鈴木半十郎

（朱書）
「拾八」
文化六巳年
御届申上候
御作事方
定普請同心
野村喜三郎
右者武州仙波御修復御用罷越候処、不埒ニ付役儀　御免小普請入押込被仰付候、私実方兄之続ニ御座候、依之御届申上候、以上
九月廿二日　橋本佐次郎　印
鈴木半十郎殿
御中間押込伺
覚
鈴木半十郎組
御中間
橋本佐次郎
右佐次郎実方兄御作事方定普請同心野村喜三郎小普請入被　仰付候ニ付、佐次郎儀押込置可申哉奉伺候、以上
御中間頭
鈴木半十郎
巳九月廿三日
右三通九月廿三日御当番弾正少弼殿江差出候処、不及其義旨御同

人被仰渡書面御返し被成候段、御部屋立円を以被仰聞候旨小島当番ニ而廻状ニ申来、其段右佐次郎江申渡候事

巳九月廿九日由右衛門当番之節廻状ニ而申来

文化六巳年九月廿三日御中間橋本佐次郎兄御作事方定普請同心野村喜三郎義、此度小普請入押込被　仰付候ニ付押込伺差出候間、兵部少輔殿江差上候処、寛政三亥年御書付之趣ニ而者伺ニ不及方思召候由ニ付、青木忠左衛門を以書面御下ケ被成候ニ付、寛政三亥年御書付之趣取調差上候旨同人を以相伺候処、此度野村喜三郎儀者役義差免、小普請入押込被　仰付候ニ付伺ニ不及旨、役義取放し、又者被召放与申被仰渡之儀者伺差出候方之由、尤役儀差免ニ而も逼塞ニ而候得者、逼塞之廉ニ而伺差出候事之由御同人より同人を以被仰渡候

右之通可相心得旨宇右衛門殿被仰渡候

九月廿三日　　〔五役承之〕

右当番所より差越五役承付返ス

（朱書）「拾九」

文化六巳年

以手紙啓上仕候、然者御組同心小柳津久三郎惣領小柳津久次郎儀、同役小島由右衛門甥之続御座候処、存寄相叶不申候間再三異見差加候得共相用不申候間、此度義絶仕候、其御方江親類書ニも出居候事故御達し申候、尤不行跡に付義絶仕候段御達申候処、左候而者久三郎御奉公も難相勤難義仕候段申聞、不行跡之文言相除呉候様いたし度旨相歎申候、子之身分之義ニ付父之勤ニ相障候義気之毒成事御座候間、善十郎江も申聞不行跡之文言相除、存寄相叶不申与認直し差出申候、依之其御方江も御達置申候、左様御承知可被下候、以上

十月　　御中間頭
大林粂右衛門
鈴木半十郎

小川七郎右衛門様
御用人中

上書殿
御用人中

御手紙拝見仕候、然者七郎右衛門組同心小柳津久三郎惣領久次郎儀、御同役小島由右衛門殿与甥之続御座候処、御存寄相叶不申候ニ付再三異見御加被成候得共相用不申候間、此度御義絶被成候段、此方親類書ニも出居候事故委細御達之趣承知仕候、七郎右衛門儀今日当御番ニ御座候間、退出之節御紙面を以可申聞候、左様御承知可被下候、右貴答如此御座候、以上

十月七日　　小川七郎右衛門内
山口久兵衛
星野十右衛門

大林粂右衛門様
鈴木半十郎様

覚

西丸御裏門番之頭
小川七郎右衛門組同心
小柳津久三郎惣領
小柳津久次郎

右者私甥之続ニ御座候処、存寄叶不申候間再三異見差加候得共
相用不申候ニ付此度義絶仕候、依之御届申上候、以上
巳九月　　御中間頭　小島由右衛門
右九月廿五日月番善十郎殿江口上添差出ス

（朱書）「弐拾」

文化七午年
午十月二日大林粂右衛門組御中間下氏金十郎鈴木半十郎印形附
之油手形取落候ニ付、押込伺当番伝右衛門殿江差出候段小島由右
衛門廻状ニ申来
御目付江　　御中間　下氏金十郎
頭印形有之焼油受取手形取落候段不調法之事ニ候、依之押込
申付之
右之通可被申渡候
右御書付出羽守殿御渡、中務殿立合伝右衛門殿被仰渡候事

（朱書）「廿壱」

文化八未年四月水野中務殿江差出ス
御中間高・役名筆順・着服
一、御中間　　羽織袴着勤
並高拾五俵壱人扶持
持高三拾俵より拾六俵迄
一、御中間組頭　　自分羽織着
但持高
一、御供組頭　　御役羽織着、年始・五節句・御祝日麻上下着仕候
但持高
一、御簾指之者　　御役羽織着
但持高之外役米拾五俵ツ、
両丸
一、御中間目付　　御役羽織着、世話役者年始・五節句・御祝日麻上下着仕候
但持高
一、御中間押　　御役羽織着
但持高
一、御持鑓之者　　御役羽織着
但持高之外役米五俵半扶持ツ、
両丸兼勤
一、御長屋御門番人　　自分羽織之者、年始・五節句・御祝日麻上下着仕候
但持高
一、新土戸番人　　右同断
但持高
一、大奥塀仕切土戸番人　　右同断
但持高
一、大奥御長屋御門番人　　右同断
但持高
一、同裏締戸番人　　右同断
但持高
一、御太鼓櫓下土戸番人　　右同断

但持高

一、二丸御長屋御門番人　右同断
但持高

一、同御台所脇御長屋御門番人　右同断
但持高

一、西丸御納戸口前番人　右同断
但持高

一、同御台所口前番人　右同断
但持高

一、同奥表仕切戸番人　右同断
但持高

一、同大奥御長屋御門番人　右同断
但持高

一、同裏締戸番人　右同断
但持高

一、御厩髪巻役　御役羽織之者
但持高之外役米五俵半扶持

一、扶持賄役　自分羽織之者
但持高

両丸

一、野方御使之者　御役羽織之者
但持高

一、昼番之者　右同断
但持高

一、定番之者　右同断
但持高

一、触番之者　右同断
但持高

右之通ニ御座候、以上

未四月　御中間頭

右大林方ニ而取調差出申候

（朱書）
「廿弐」

文化八未年

御中間大縄屋敷取戻
之儀奉願候書付

覚　月番

拝領大縄町屋敷　御簾中様御広敷御用部屋
巣鴨大原町　伊賀格吟味役
坪数七拾五坪　岩下孫四郎

右孫四郎儀　御簾中様御広敷御用部屋伊賀格吟味役被　仰付、是迄拝領仕罷在候御中間大縄町屋敷差上候ニ付、先格之通御中間江御返被下候様奉願候、以上

未十二月　三　名

右御扣共三通、例書壱通

例書

拝領町屋敷本所中ノ郷新町　御普請役
坪数八拾九坪余　恩田半助

右半助屋敷差上候ニ付、文化八未年八月御中間方江取戻願御月番村上監物殿江差出候処、同九月二日御返被下候旨駿河守殿被仰渡候段、彦坂三太夫殿御立合安藤弾正少弼殿被仰渡候

未十二月

（朱書）「廿三」

文化八未年

覚

煩　　御小人頭　長田八十五郎

類焼休　　同　柳田久左（右）衛門

右両人書面之通御座候ニ付、小永井惣太夫壱人勤ニ罷成候間、前々之通御用透之節者日々相伺早帰仕候、尤天明五巳年山川下総守より早帰之儀被申渡候、依之申上置候、以上

未十二月十三日　　御中間頭

（朱書）「廿四」

文化八未年

駿河守殿林阿弥を以御渡

御目付江

惣而御役替・御番入等被　仰付御切米・御足高被下候面々、十月以後被　仰付候節者向後半年分可被下候

右之通向々江寄々（ママ）可被相達候、尤西丸御目付江も可有通達候

十二月

（朱書）「廿五　廿七与組合」

文化九申年

申四月四日中務殿より被遣

御目付衆　　御納戸頭

御支配向江御四季施其外定式相渡候品々之儀、御倹約御年限中者壱ケ年渡高之内左之通代金ニ而相渡申度此段御問合申候

御中間
御小人　渡り
御駕籠之者

一、熨斗目小袖　　壱ケ年　六拾六　○

内

三拾三　表裏共品ニ而渡
三拾三　代金渡

此代金四拾壱両壱分
表壱ツニ付金壱両
裏壱ツニ付金壱分

外綿代金是迄之通

御小人
御中間　渡り

一、綾縞小袖　　壱年渡り高　拾　△

内

五ツ　表裏共品ニ而渡
五ツ　代金渡

此代金六両壱分
表壱ツニ付金壱両
裏壱ツニ付金壱分
外綿代金是迄之通
右之通御座候、以上
申四月　御納戸頭
右者御納戸頭より懸合之書面入用之ケ所計書抜申候
○書面熨斗目小袖之儀、御中間方江壱ケ年七ツ宛受取組内役々江相渡候ニ付、右引分方差支申候間是迄之通御品ニ而相渡り候様仕度旨組之者相願申候
四月　御中間頭
△書面綾縞小袖之儀、御中間方江壱ケ年壱ツ宛受取御供組頭五人ニ而順年ニ請取御供服ニ着用仕候ニ付、是迄之通御品ニ而相渡候様仕度旨組役人共相願申候
申四月　御中間頭
右下ケ札いたし四月中務殿江申上候処、猶又内訳等御覧被成度由被仰渡候ニ付、左之通認差出申候
此度御倹約厳敷被　仰出候ニ付、右御年限中定式御納戸より請取候着物類、半分宛代金ニ而御渡ニ相成候而も差支無之哉之旨、当四月御納戸頭衆より御問合有之候旨被仰渡候に付、其節組々之者江申渡候処代金ニ而も調達難仕品も御座候間、是迄之通御品ニて受取申度旨相願申候、且又御品与代金ニ而者振分渡方等ニも差支候ニ付其段申上候処、猶又此度御問合之趣被仰渡奉承知候、然ル処此度被仰渡候ニ者代金之積ハ先達而之代金ニ少々殖候得共、中々自分ニ而調達難仕難義仕候間、先達而申上候通御品ニ而御渡被下候様仕度奉存候、尤去暮熨斗目半分代金ニ而御渡相成候得共壱ケ年限之儀故作略為仕候処、定年代金渡りニ相成候而者別紙之通組内役々ニ而引分候ニ付、三ケ年ニ壱度或者五ケ年ニ壱度、又者隔年ニ受取候向も有之候ニ付、御品ニ無之候而者甚難義仕候、且又小給之者共故御金渡り相成候ハヽ、区々之品ニ而も着用仕　御目障り等ニも罷成候而者奉恐入候義ニ御座候間、何レニも是迄之通御品為受取申度奉存候、以上
申七月　御中間頭
御小人頭
御駕籠頭
御中間方
御小人方
江請取候着物類組内役々江相渡候内訳
一、綾島小袖　十
内
壱ツ　御中間方　壱ツ
御小人方　九ツ
御供組頭　五人
此分五ケ年ニ壱度受取申候
弐ツ　御使組頭　六人
此分三年ニ壱度受取申候
五ツ　御草履取　十人
此分隔年受取申候
壱ツ　御小道具世話役　三人
此分三年ニ壱度受取申候

壱ツ　　御日傘役　壱　人
此分毎年受取申候
一、熨斗目小袖　廿三　　御中間方　七　ツ
内　　御小人方　拾　六
壱ツ　　御供組頭　五　人
此分五ケ年ニ壱度受取申候
弐ツ　　御使組頭　六　人
此分三ケ年ニ壱度受取申候
六ツ　　御中間御籏指之者　五十五人
此分右人数ニ而順番ニ受取申候
九ツ　　同断昼番之者　五十人程
此分三ケ年目位壱度受取申候
四ツ　　御小道具　廿五人
此分十ケ年目位ニ壱度受取申候
壱ツ　　御使之者　四十人余
此分毎年受取申候
一、帷子　十　　亀井坊　壱　人
但毎年五月受取申候
一、麻上下　四具　　御草履取　十　人
内
三具
此分三ケ年ニ壱度受取申候
壱具　　御日傘指　壱　人
此分毎年受取申候

右之通御供人数丈ケ着物員数受取候ニ付、内訳書面之通ニ御座候得者御品ニ而為請取申度奉存候、尤帷子之儀者御草履取十人江為御四季施毎年被下置候得共、薄物之儀ニ付其年内ニ者損し候ニ付、是又御品ニ而為受取申度奉願候、以上

七月　　御中間頭
御小人頭

右之通認差出候処、中務殿三役之頭江御逢被成、尤ニ者候得共斯申立候而も下々ニ而内々御納戸江懸合、御品戻し代金請取候趣ニも相聞候ニ付、以来左様之義有之候而ハ不相済候間、成丈ケ勘弁いたし代金渡取交候様被仰渡候間評議いたし候処、御中間抔ハ御納戸江直懸合致候事無之、御駕籠之者多分参候事故御駕籠頭江得与申談、最初御納戸より懸合之通半分代金渡りニ而も差支無之旨、八月　日書面中務殿江差出申候、右ニ付代金渡ニ相成候ハヽ、是迄濡御手当之通之員数ニ而相渡候様御納戸頭江御懸合可被成旨、中務殿被仰聞候事

支配向御四季施代金渡之儀ニ付別紙之通御掛合之趣相糺候処、当四月御掛合之砌及御挨拶候通向々差支之儀共申出候得共、再応御懸合之義ニ付雨天之節濡御手当銀受取高江も見合取調候処、熨斗目小袖之儀者銀五匁程相増有之候ニ付、右者相減濡御手当銀之通綿代共銀百四拾五匁渡り之積ニいたし、其外者何も少々宛相減有之候ニ付、右之分も濡御手当銀之通相成候得者、猶又勘弁いたし取調方も可有之候間、今一応御申聞可有之候、則御差越之書付添此段及御掛合候、以上

○

八月　　水野中務

御書面被仰聞候御支配向御四季施代金渡之義ニ付再応及御懸合候処、雨天之節濡御手当銀之通相成候得者、猶又御勘弁之上御取調方も可有之旨被仰聞致承知候、則御懸合之趣を以取調候処、濡御手当銀之通ニ而も御買上直段より者減方も御座候義ニ付、御四季施渡り高半分迄者代金ニ而相渡候而も御差支無御座候哉、此段及御懸合候

△

九月　　御納戸頭

御納戸頭衆江之御掛合書御下ケ被成御書面之趣奉承知候、右ニ付御倹約御年限中者御四季施半分迄ハ御品ニ而為受取、其余者濡御手当之通御銀ニ而受取候而も御差支無御座候、乍然新役被　仰付候節并御品員数不足仕差支候節者、半分より余慶ニも御品ニ而受取候様仕度奉存候、尤其節者前広ニ申上候様可仕候、勿論可成丈作略仕御品者三分一ニも受取、其余者御銀ニ而為受取御間ニ合候様可仕候、且帷子之義者先達而申上置候通年々御品ニ而受取申度奉存候、依之申上候、以上

○

九月　　御中間頭
　　御小人頭
　　御駕籠頭

九月十三日書面之通申上候而、存寄無之哉之旨御納戸頭より差越、中務殿下ケ札之写御見せ被成候

御四季施渡之品々
代金被下候義奉伺候書付　　御納戸頭

御小人・御中間・御駕籠之者・御草履取等江年々御四季施被下候品之儀、渡高半分程も代金ニ而被下候方御入用相減可申儀ニ付御目付方江申談候処、雨天之節濡御手当銀之通相渡り候得者、壱ケ年受取高之内半分迄者代金被下候而も差支無之、尤御断書面者是迄之通居置、代金人数之儀者其節々私共江可申聞旨水野中務申聞候ニ付、取調候処左之通

差引

右之通御入用も相減候儀ニ付、渡高半分程者代金ニ而被下候様取計可申哉、此段相伺申候、以上

九月　　水野中務

書面之通被相伺候而も存寄無之候

一、西丸も同様之趣西丸御納戸頭より懸合、市右衛門殿御尋ニ付都而　御本丸之通半分、又者其余も代金渡ニ而も差支無之旨下ケ札いたし遣候

（朱書）
「廿六」
文化九申年

御城内　御成、遠　御成　還御夜ニ入候節并御門開七時之節、御中間方・御小人方六ケ所御番所江受取候蠟燭是迄弐拾匁掛御座候処、此度減方之儀御挑灯奉行申聞候間番人共相紛候処、大丸御挑灯江灯し候間、是迄之通弐拾匁掛受取申度旨番人共申聞候、此段御挑灯奉行江被仰渡可被下候、以上

申八月　　御中間頭
　　御小人頭

右書面中務殿江十二日出ス、廿一日御附札ニ而被仰渡候

「書面之蠟燭年始・御謡初・玄猪・表御能等、且　通御　御成
　還御之節とも弐拾匁掛為請取　通御無之　御成ニ而御門明
七時、又者　還御夜ニ入候歟、其外非常ニ而御登　城有之候
節者拾五匁掛可受取候」

（朱書）
「廿七　廿五与組合」

文化十四丑年正月十九日忠兵衛殿一雲を以被遣、三役申合之上同
廿二日下ケ札いたし祐伝を以上ル

御目付衆　　御納戸頭

御支配向江御四季施被下候品々、先達而御掛合之上御倹約御年
限中者被下高半分代金ニ而相渡来候処、御年限も相満候ニ付可
為申年以前之通旨被仰渡候間、右御四季施之品々前々之通不残
御品ニ而相渡可申処、代金渡之方御入用も相減候ニ付、代金渡
之方可然旨御勘定所より申聞候間、是迄之通被下高半分代金ニ
而相渡可申与存候、此段及御懸合候、以上

丑正月　　御納戸頭

「下ケ札
書面御四季施被下之品々、御倹約御年限中之
通半分代金ニ而相渡り候而も御差支無御座候
丑正月　　御中間頭
　　御小人頭
　　御駕籠頭」

（朱書）
「廿八」

文化十酉年

酉十一月三日田宮殿御尋、同五日挨拶済

一、御中間より御厩御口之者江往古相分候年月相知候ハヽ、被成御
聞旨田宮殿被仰渡候段古屋平左衛門申聞候ニ付相糺候処、組頭
次右衛門より書面差出候間、則左之書面右平左衛門江差遣、尤
年久敷儀故委細之儀者相分り兼候段及挨拶候事

「御中間より諏訪部文右衛門支配御口之者ニ相成候年月左之通
御座候
　享保八卯年四月」

（朱書）
「廿九」

享和二戌年

西丸御持鑓之者増人之儀奉伺候書付　　鵜殿式部

覚

御奉公年数弐拾五年　　石川友一左衛門組
　　昼番之者
　　印藤小左衛門
　　戌四十一歳

御奉公年数拾四年　　同断
　　市川藤四郎
　　戌三十九歳

御奉公年数拾弐年　　同断
　　秋元直三郎
　　戌三十一歳

御奉公年数七年　同断　触番之者　小幡善三郎　戌三十五歳

御奉公年数弐拾三年　松崎嘉藤太組　昼番之者　真壁岩五郎　戌四十歳

御奉公年数拾年　同断　同断　杉山喜太郎　戌三十三歳

御奉公年数九年　同断　定番之者　藤原忠七　戌二十五歳

御奉公年数五年　同断　触番之者　佐野庄蔵　戌二十一歳

御奉公年数四年　鈴木半十郎組　西丸野方御使之者　小林市郎左衛門　戌三十五歳

御奉公年数拾弐年　同断　昼番之者　鳥飼久太夫　戌二十九歳

御奉公年数拾年　同断　定番之者　木村喜四郎　戌四十歳

御奉公年数八年　同断　同断　清水吉五郎　戌二十五歳

右之者之内ニ而壱組弐人宛都合六人、此度西丸御持鑓之者増人申付度奉存候、依之奉伺候、以上

戌三月　御中間頭　石川友一左衛門　松崎嘉藤太　鈴木半十郎

右享和二戌年三月二日西丸鵜殿式部殿江差出、同八月廿日左之御書取西丸次左衛門殿御立合次兵衛殿被仰渡候

石川友一左衛門組　昼番之者　印藤小左衛門

松崎嘉藤太組　昼番之者　真壁岩五郎

鈴木半十郎組　野方御使之者　小林市郎左衛門

同人組　定番之者　木村喜四郎

右西丸御持鑓之者増人可申渡旨能登守殿被仰渡候間可被申渡候

（朱書）「三拾」

享和二戌年

御中間大縄屋敷取戻之儀奉願候書付

覚

拝領町屋敷　本郷元町　七拾五坪五合五勺

月番　伊藤（東）長兵衛　遠山金四郎

御台所番　村田清四郎

同添地
湯島樹木谷
五拾三坪四合壱勺

右清四郎儀御扶持被　召放町屋敷地上り相成申候、右者御中間大縄屋敷御座候間、先格之通御中間組江御返し被下候様奉願候、以上

（朱書）
「享和二」戊七月

御中間頭
石川友一左衛門
松崎嘉藤太
鈴木半十郎

右御扣共三通、例書壱通

例書

御目付支配無役
高井元次郎

右元次郎儀天明三卯年四月重追放被　仰付候処、御中間大縄屋敷ニ付取戻之儀申上、同年五月十三日願之通元組江御返被下候段石見守殿被仰渡候

覚

上り地面
本郷元町
七拾坪五合五勺
同添地
湯島樹木谷
五拾三坪四合

御台所番
村田清四郎

右昨廿五日根岸肥前守組与力蜂屋市左衛門・小田切土佐守組与力松原伴右衛門両人罷越、地面引渡候ニ付請取候旨組頭申聞候、依之申上候、以上

戊七月廿六日

御中間頭
石川友一左衛門

右壱通当番長兵衛殿江差出

地面引渡人名前

根岸肥前守組与力　同組年寄同心　小田切土佐守組与力　同組年寄同心
蜂屋市左衛門　川口半十郎　松原伴右衛門　滝田宇右衛門
地割役　町年寄手代
樽屋三右衛門　柳井猪十郎
吉田庫蔵

御目付衆

小田切土佐守
根岸肥前守
柳生主膳正

元御台所番村田清四郎儀、湯島三組町拝領地面上り高引当五ケ年成崩之積を以去ル午五月中町会所金貸附有之、是迄月々割合之通元利返金致し未タ残金有之候処、此度同人御扶持被　召放右地面上り地ニ相成候間町役人共預ケ置、前書貸附金皆済迄者去々子年伺済之趣を以月々上り高町会所江取立、元利皆済之上地面返納之積有之候、然ル処右者御支配向大縄屋敷之内ニ付、追而者御支配向江御返シ被下候様御申上も可有之哉、前書貸附金皆済迄ハ余人江被下候儀者御見合有之候積り、元伺済ニ有之候間為御心得此段及御懸合置候

戊七月

去々年中町会所金貸附有之候元御小人金指藤作上り地面大縄組屋敷之儀ニ付元組江御返被下、跡拝領主相川幸助儀町会所

貸附金引請、月々割合之通相納候義ニ付本文上り地之儀も右
振合ニ相成候得者差支之筋無之候

（朱書）
「三拾壱」
享和二戌年
一、拝領屋敷ニ住居不致他所ニ而居宅類焼仕候而も御届差出候、是
者類焼休御取越米等申立候事有之候ニ付進達ニ相成候事
一、他所ニ借地等致し罷在拝領屋敷地借り之者計類焼之節者、届頭
限りニ而進達者不致候事
享和二戌年十二月取極

（朱書）
「三拾弐」
文化十酉年
拝領屋敷相対替之儀
申上候書付　月番　彦坂三太夫
本多丹下
覚
巣鴨五軒町末
一、六拾六坪
右屋敷大木七之助江
末次佐吉組
御中間
朝倉貫蔵
但元文元辰年十二月祖父朝倉庄五郎拝領仕、其後相対替等不
仕候
巣鴨五軒町
一、五拾四坪
鈴木半十郎組
御掃除之者
大木七之助
右屋敷朝倉貫蔵江
但何之頃拝領仕候哉、先年類焼之節書物焼失仕年月等相知不
申候、尤是迄相対替等不仕候
右之通屋敷相対替仕度旨相願候ニ付申上候、願之通被　仰付被
下置候様仕度奉願候、以上
酉五月
御掃除頭
鈴木半十郎
御中間頭
末次左吉

例書
拝領屋敷
小石川鷹匠町
一、百坪余
右屋敷平五郎江
大林粂右衛門組
御中間
加藤吉之助
拝領屋敷
小石川白山御殿跡
一、六拾五坪
右屋敷加藤吉之助江
御台様御広敷
御下男
平五郎
右之通屋敷相対替願文化七午年七月晦日月番大河内善十郎・榊
原隼之助江差出候処、同年八月十六日願之通相対替被　仰付旨
以御書付駿河守殿被仰渡候段、安藤弾正少弼立合榊原隼之助申
渡候、以上
酉五月
御掃除頭
鈴木半十郎
御中間頭
末次左吉
右願書三通・例書壱通都合四通酉五月廿七日三太夫殿江差出、同七
月十二日駿河守殿御書付を以願之通被仰渡候段、助右衛門殿被仰

渡候ニ付鰭付返上いたし候事

御目付江

大木七之助拝領屋敷
巣鴨五軒町
五拾四坪

御中間
朝倉貫蔵江

朝倉貫蔵拝領屋敷
同所
六拾六坪

御掃除之者
大木七之助江

右願之通屋敷相対替被　仰付候、御普請奉行可被談候

（朱書）
「三拾三」

文化十一戌年

御関所御手判願下書

小女壱人従江戸甲斐国「何郡」（朱書）八代村迄差遣申候、小仏御関所無相違罷通候様御手判可被下「置」候、右者私孫女ニ而御座候、若此小女ニ付以来出入之儀出来仕候者私申披可仕候、為後日証文差上申候、仍如件○

末次佐吉組
御中間御供組頭
小永井佐兵衛　印　書判

文化十一甲戌年三月
「太田志摩守殿」（朱書）
駒木根大内記殿
石河若狭守殿

佐野豊前守殿
太田志摩守殿

表書之小女壱人紛無御座候「間」（朱書）御手判「被遣」（朱書）可被下候、小永井佐兵衛儀私組ニ付裏判如斯御座候、以上

御中間頭
末次佐吉　印

下ケ札
「下書懸紙之通ニ而宜候、本紙差出候節此下書添可差出候」○

右者美濃紙竪物ニ認、御留守居衆御聞合被下候様三月二日御月番監物殿江出ス、尤右孫女当戌十九歳ニ候得共、眉毛有之鉄漿附不申候ニ付小女与相認、且歩行ニ而罷越候旨覚書いたし、此趣も御懸合被下度趣口上添申上候、同六日朱書之通御留守居衆より懸紙幷下ケ札等有之、則監物殿被遣、但宛名月番初筆ニ而候

御関所御手判願

小女壱人従江戸甲斐国八代郡八代村迄差遣申候○（朱書）小仏御関所無相違罷通候様御手判可被下置候、右者私○孫女ニ而御座候、若此小女ニ付以来出入之儀出来仕候者私○申披可仕候、為後日証文差上申候、仍如件○

文化十一甲戌年三月

御中間御供組頭
小永井佐兵衛　印　書判

太田志摩守殿
駒木根大内記殿
石河若狭守殿
佐野豊前守殿

表書之小女壱人紛無御座候間御手判被遣可被下候○小永井佐兵衛儀私組ニ付裏判如斯御座候、以上○

御中間頭
末次佐吉　印

右程紙竪紙ニ認上包美濃紙、御目付衆扣美濃紙ニ而壱通上包半紙并下書添、尤是ハ印・書判与認三月八日監物殿江差出、同十日御留守居衆手判御同人より当番所作右衛門を以御渡相成候事

末次佐吉断
小女手形　　壱枚

小女壱人従江戸甲斐国八代郡八代村迄小仏関所無相違可被通候、小永井佐兵衛与申者之孫女之由致書物○其上末次佐吉断付如斯候、以上○

文化十一年戌三月九日　志摩　印
豊前　印
若狭　印
内記　印

小仏　　人改中

私組御中間御供組頭小永井佐兵衛孫女壱人、甲州八代郡八代村迄差遣申候ニ付、小仏御関所罷通候様御留守居衆御手形之儀相願、当月十日御渡御座候、然ル処右孫女儀、其砌より傷寒相煩候間出立見合療養仕罷在候処、昨廿八日朝六ツ時病死仕候、依之御手形返納為仕度奉存候、取計方如何相心得可申候哉奉伺候、以上

戌三月廿九日　　御中間頭
末次佐吉

右監物殿江差出候処、御留守居衆江御懸合有之候上即刻御手形返納相済、此方より差出候御手判願本紙・下書とも四月七日御返しニ相成候事

（朱書）
「三拾四」

文化十一戌年

戌四月五日西丸より御小人目付を以被遣直ニ承附返上、即日御番所々々江申渡済

御中間頭
御小人頭江

御長屋御門番人
御納戸口番人
御台所前仕切戸番人
奥表仕切戸番人

右者来ル廿九日より五月六日迄御堀中往来并供之者等御堀之方江附不申、西之方江片寄罷通候様制し、尤御堀建候節往来立留り候儀抔無之様別而制候様右御門々々番人江可申渡候事

一、右御門々々御堀中致不寐夜中御場所相廻り候様可致候、尤御長屋御門・奥表仕切戸番人者致増人、都合三人宛ニ而相勤候様可致候、且奥表仕切戸御番所江掛り御小人目付弐人ツ、泊候事

一、御槻建・御道具建候御場所江夜中大丸御挑灯相建候ニ付、御番所持場内ニ而右御挑灯可致世話候、尤火鎮候節表火之番立合候事

一、右番人五月朔日・五日麻上下着用候様可申渡事

一、御槻御用ニ付、来ル廿九日并五月六日右両日御使之者拾人宛可差出事

右之通可申渡候、尤諸事前々御槻建候節之通可相心得候事

四月　　曽我七兵衛
　　中川惣左衛門

壱岐守殿
駿河守殿

西丸御用

西丸御台所江御断

覚

当月廿九日より来月六日迄朝夕御夜喰共

中川惣左衛門
夏目次郎右衛門(左)
西丸御長屋御門番
増人共　三　人
御同所奥表仕切戸番
増人　壱　人

同断

右者御槻御用ニ付昼夜詰切不寐仕候ニ付、書面之通御台所被下候様御断被仰渡可被下候、以上

戌四月　　御中間頭
　　大林粂右衛門
　　末次佐吉
　　小宮山作右衛門

左兵衛佐殿
駿河守殿

西丸御用

御挑灯奉行江御断

覚

御役附

一、箱御挑灯　　四張
　　但棒共
　　四拾八挺
　　但弐拾目掛

一、蠟燭

右者御槻御用中西丸御長屋御門番人・同御納戸口御門番人・同御台所前仕切戸番人・同奥表仕切戸番人夜廻り相勤仕候ニ付、受取申度奉存候、御挑灯奉行江御断被仰渡可被下候、以上

戌四月　　御中間頭
　　大林粂右衛門
　　末次佐吉
　　小宮山作右衛門

右両様御扣共四通宛四月十六日御掛り惣左衛門殿江差出、同廿九日御挑灯・蠟燭共受取、五月六日御挑灯ハ御挑灯奉行江差戻候事

(朱書)「三拾五」

文化十一戌年

戌七月三日御月番伝右衛門殿江差出、即刻御聞済有之

覚

大林粂右衛門組
御中間　向田庫太郎
末次佐吉組
御中間目付
小林八兵衛

右者病気ニ付摂州有馬江湯治仕度旨相願申候間申上候、以上

戌七月　　御中間頭
　　大林粂右衛門

戌七月十六日嘉朴を以御当番江差出

覚

大林粂右衛門組
御中間
向田庫太郎
末次佐吉組
御中間目付
小林八兵衛

右病気ニ付摂州有馬江為湯治今朝六時板橋通出立仕候旨相届申候、依之申上候、以上

戌七月十六日

御中間頭
大林粂右衛門
末次佐吉

末次佐吉

戌九月十九日御当番江差出

覚

大林粂右衛門組
御中間
向田庫太郎
末次佐吉組
御中間目付
小林八兵衛

右者摂州有馬江為湯治先達而罷越候処、昨十八日帰府仕候旨相届申候、依之申上候、以上

戌九月十九日

御中間頭
大林粂右衛門
末次佐吉

（朱書）「三拾六」

文化十一戌年

「御作事奉行衆

覚

一、御長屋御門御番所

右者御挑灯建置場下掃除口弐ケ所有之、臭気も相掛り其上甚手狭故　御成之節其外御挑灯建出シ入差支申候間、御場所御修復有之候節三尺通り押出し、別紙絵図面朱引懸紙之通相成候様仕度旨番人共相願申候、依之申上候

右之通御中間頭申聞候間御達申候、以上

戌八月

彦坂三太夫
村上監物

ここに挿入図あり（巻末参照）

（朱書）「三拾七」

文化十一戌年

「御作事奉行衆

覚

一、新土戸御番所

右者御挑灯建置場無之御番所脇江差置候ニ付通御之節々取片付仕、且　還御及暮候砌別而差支候間、右御場所御修復有之候

節、御挑灯建置場御番所脇江出来候様仕度旨番人共相願候、依之申上候

右之通御中間頭申聞候ニ付御達申候、以上

戌八月　　彦坂三太夫
　　村上監物

右御達・絵図面共弐通宛八月廿五日監物殿江年番小宮山作右衛門差出ス

（朱書）「三拾八」

文化十一戌年

竹千代様御不例御養生不被為叶今未下刻　御逝去被遊候、為伺御機嫌明廿七日御三家始　御本丸・西丸江惣出仕之事

文化十一戌八月廿六日

備前守殿

竹千代様御逝去ニ付普請者来月朔日迄、鳴物者同十八日迄停止候間得其意可被相触候

八月廿六日

公方様　御台様御定式之通今日一日御遠慮被遊候

大納言様　御簾中様ニ者御定式之通明後廿八日迄御遠慮被遊候事

八月廿六日

八月廿九日　壱岐守殿

竹千代様御院号

玉樹院様与奉称候事

周防守殿

玉樹院様　御出棺

九月四日　午上刻

右之通ニ候間得其意向々江可被達候

「近江守殿
西丸御用
臨時
御細工所江御断
覚

村上監物
中川惣左衛門

一、白衣　百五拾四　御持鑓之者
御小道具之者
御小人

一、黒加賀絹裕羽織　六拾九　御中間目付
御小人目付
御中間押
御小人押
御玄関番

一、黒絹単羽織　六拾九　御中間
御小人

右者此度増上寺　御葬送為御用御供御先江罷出候御中間・御小人江書面之通為受取申度奉存候、此段御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

戌九月　　御中間頭
　　御小人頭

「近江守殿
西丸御用
臨時
御納戸江御断

村上監物
中川惣左衛門

覚

一、麻上下　七具　　御中間御供組頭
　　御小人御使組頭
　　御草履取役

一、綾島袷　七ツ　　御中間御供組頭
　　御小人御使組頭
　　御草履取役

一、熨斗目袷　四拾六　　御長刀役
　　御持鎗之者
　　御小道具之者

右者此度増上寺　御葬送為御用御供御先江罷出候御中間・御小人江書面之通為請取申度奉存候、此段御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

戌九月　　御中間頭
　　御小人頭

戌九月五日御当番江差出
　　西丸御用
　　御台所江御断返
　　覚　　三宅市右衛門

　　御中間
　　御小人　合弐拾五人

右者　竹千代様為御供扣罷出候間、日々御台所被下候様去酉十一月御断申上候処　御出棺相済候ニ付、御断返之儀御賄方江被仰渡可被下候、以上

戌九月　　御中間頭
　　御小人頭

戌九月九日西丸懸り御徒目付近藤新吉を以差出

西丸御用
　　臨時
　　御細工所江御断
　　覚　　村上監物
　　中川惣左衛門

一、黒加賀絹袷羽織　拾四　　御中間目付
　　御小人目付

一、黒絹単羽織　弐拾三　　御小人

右者当月四日増上寺　御葬送之節、御供　御先江罷出候者共江着物受取相渡候後、追々御断相下り書面之人数差出申候、着物之儀者定式受取候羽織相用候ニ付、右人数之分羽織為受取申度奉存候、此段御細工所江被仰渡可被下候、以上

戌九月　　御中間頭
　　御小人頭

（朱書）「三拾九」

文化十二亥年

亥八月廿二日御扣共弐通次兵衛殿江差出
　　御中間・御小人御抱替　　月番　永井靱負
　　之儀奉伺候書付　　仙石次兵衛（治）
　　覚　　部屋住
　　御中間
　　御小人

御切米
一、拾弐俵　　三拾弐人
　　壱人扶持　　三拾壱人

寛政九巳年十月
享和二戌年十一月

右者父家督ニ相成候歟其身病気ニ而御奉公難相勤節者、其度々御切米御扶持方差上候様被仰渡候者ニ御座候、然処明和七寅年十

月御中間倅共御切米拾弐俵宛ニ而新規御抱入被　仰付候砌者、並高拾五俵壱人扶持之者同様相勤候義ニ付相願、並高之者明キ御座候節々繰上御抱替罷成、新規御抱入之御切米御扶持方者其度々差上申候、其後前書之拾弐俵壱人扶持之者新規御抱入被仰付候得共、中絶仕候ニ付御抱替不申上候、以来並高之者明御座候而、倅共之内御奉公可相勤相応之者無御座候節者、明和度之通繰上御抱替申上候様仕度奉願候、且御小人之儀者前々御抱替申上候儀者無御座候得共、御中間同様之義ニ御座候間、以来前文之通是又繰上御抱替申上候様仕度奉願候、以上

亥八月　　御中間頭
　　御小人頭

（朱書）「四拾」

文化十三子年三月差出　　台方
　　御長屋御門番

口上書を以奉願上候覚

私共同役弐拾弐人ニ而相勤候内、泊り除キ奉願昼之内計罷出相勤、泊り相勤候者拾七人有之、右之内本役拾弐人・見習之者四人打交り相勤、右見習之者四人之儀者小宮山様御組内より被仰付候処、先年台方昼番役より寛政二戌年十二月迄小林様御組筋より山崎甚三郎儀被　仰付相勤、其後同十一未年九月迄末次様御組筋より成島弥市儀被　仰付相勤候処、其後台方内より見習不被　仰付暫く中絶仕罷在申候、然処台方大人数之内壱人ニ而も勤候場所退転仕候而者如何ニも御座候処、此度同役山本藤助義御役　御免之儀奉願候ニ付、右見習四人之内より右跡役江操上ニ相成候ニ付、見習跡役之儀可被　仰付候ハ、先例も有之候義ニ御座候間、何卒此度台方より被　仰付被成下候様偏ニ奉願上候、以上

子三月　　台方御長屋御門番
　　安藤幾右衛門
　　堀内長八
　　榊原伝吉
　　宇佐美勇右衛門
　　桜井甚五右衛門
　　市江与惣次

末次佐吉殿
小林五兵衛殿

子閏八月十六日監物殿江口上ニ而巨細之儀申上、左之書面上ル

此度御長屋御門助役壱人明キ御座候間、私共組之内より被　仰付被下置候様両組御長屋御門番相願候ニ付取調候処、寛政二戌年迄五兵衛組筋より山崎甚三郎申渡相勤、同十一未年迄兵太夫組筋より成島弥市申渡相勤候処其後中絶仕、作右衛門組筋より申渡来候、元来私共両組御中間多人数之処、壱人ニ而も勤候御場所退転仕候而者組之者甚歎ケ敷、殊ニ励ニも不相成候間、前文御長屋御門番助役両組之内より被　仰付候様私共江願出候間、御内慮奉伺候、以上

子閏八月　　御中間頭
　　小林五兵衛
　　神谷兵太夫

子閏八月廿日常次郎殿五兵衛江御談有之候者御長屋御門番助役之

儀、書面之趣者一通り之義ニ而作右衛門方より者巨細ニ申立候ニ付、両組之儀も最初より之訳合委敷書面ニいたし差出可然旨被仰聞候ニ付則相糺候処、台方より差出候書面左之通

口上書を以申上候

前々より御長屋御門番定人数ニ而者御礼日之節御人少ニ付、御年始・玄猪・御謡初・五節句其外御礼日等之節、為加番台方より九人宛罷出、壱人組頭附添、昼番より八人以上九人宛当日当りを以加番ニ罷出候処、定役之内年来之者も有之候ニ付、世話役与唱泊り除之儀奉願候処、右世話役被　仰付被成下置候ハ、九人宛罷出候、加番世話役より罷出相勤、台方より出勤為致間敷旨御頭松崎新右衛門殿御勤役之節奉願候処、願之通被　仰付加番之儀相止申候、其頃定役山崎次左衛門年来ニも相成候ニ付世話役可被　仰付旨被仰渡候処、御人少之御場所ニ付倅甚三郎義御長屋御門番助役被　仰付被成下置候得者、附添可相勤り旨ニ付甚三郎儀助役被　仰付候、其節台方両御組より替之助役被　仰付旨被仰渡候、右甚三郎跡江右組より定役成島弥源太倅弥市被仰付候、右弥市跡助役之儀定役之内相応之倅も無之、御頭様ニも御替り被遊段々等閑ニも相成居候処、其後御頭鈴木半十郎様御勤役之節相応之倅も有之候ニ付奉願候、西久保同役共より古来之仕来等申上候付、先ツ此度助役之儀者西久保より罷出候処、折も可有之旨被仰渡候、其節市江与惣次儀世話役被仰渡候、

右之段御尋ニ付奉申上候、以上

閏八月　　台方
　　御長屋御門番

閏八月廿二日西久保組江も相尋候処、左之書面池内長右衛門より差出

覚

従三州御供仕候西久保御組廿二人之者儀者、乍恐　　権現様御代於三州御手廻御中間ニ被召抱、所々御供仕御当地江被召連、慶長十九年、頭・組共ニ弐拾弐人於西久保組屋敷拝領仕候、然ル処元和二辰年青山伯耆守殿・酒井備後守殿被仰渡、御供役御免被遊　御本丸御長屋御門番一役永々相勤候様被　仰付候、尤組弐拾壱人之内組頭弐人・当所触番役壱人・御長屋御門番拾八人相勤申候

西久保　　頭　内田与左衛門
　　組弐拾壱人　御長屋御門番　長坂次右衛門
元禄九子年自害仕候ニ付
跡式無之候　　同　池内長右衛門
右同時御役　御免

右両人御門番明候節、畔柳助九郎殿・大岡金三郎殿御両人御預り組ニ御座候節、西窪之内年若成者共故助九郎殿・金三郎殿御両組より壱人宛御長屋御門番江加入被致、其後追々両御組より四人迄被入、都合六人台方より入申候、依之御長屋御門番相勤候筋目之者も外役相勤難儀仕候ニ付、其節之御頭様方江元禄年中・宝永年中・正徳年中迄度々御願申上候得共御打捨被置候、其後一組より六人宛三組出会勤被成候様承り候間、古来より之被仰渡も怠転ニ及候ニ付仲ケ間共一統相談仕、無是非御目付衆江御願可申上与願書相認、御徒目付組頭衆者日頃御番所ニおゐて御懇意被成下候ニ付、正徳五未年正月組頭衆依田十郎兵衛殿・野田源兵

衛殿江右書付を以内々相伺候処、則御両所願書御請取被成承り
届候間、先御目付衆江罷出候義者相止可申旨御留メ被成候付、
此上者何分宜様御取計奉願与申上置候処、御頭様方江御懸合被
成下、向後台之御組より壱人も御長屋御門江入申間敷旨御堅メ
被成下、以来者台方六人切一組より三人ツヽニ相極候、西久保
拾弐人ニ罷成相勤申候

一、天明三卯年七月西久保御長屋御門番之儀者代々役之儀ニも候間、
筆頭之者より世話役三人被　仰付候、泊り用捨日々壱人宛罷出
相勤申候

一、同五巳年十月世話役増壱人被　仰付

一、天明四辰年閏正月御長屋御門番助役之者於西久保新規三人被
仰付候

一、同年八月台之御組より壱人御長屋御門番助役被　仰付候

右之通御座候、以上

西久保
御長屋御門番

閏八月

子九月二日常次郎殿江上ル、尤書面ニ書載不申所ハ委細口上ニ而
申上候処、御評議之上可被仰渡旨被仰聞

御長屋御門番助役之儀取調候処、一躰往古右御門番之儀者西久
保組之者拾八人ニ而相勤候由之処、元禄年中両人明キ候砌、私共
組筋より壱人宛被　仰付、其後追々両組より四人猶又被　仰付
六人ニ治定仕、西久保組之者拾弐人都合拾八人之定人数ニ而相勤
来、其頃者年始・五節句其外御礼日等之節手足不申候趣ニ而台方
昼番役之者より八人、組頭壱人附添為加番罷出相勤候由之処、
松崎新右衛門御中間頭勤役之節、西久保組之内年来相勤候者三
人世話役被　仰付泊り用捨ニ相成候得者、以来右昼番役より加
番差出候儀者相止、御礼日等之節者世話役惣出仕御間ニ合可申
旨申立候趣を以天明三卯年七月初而世話役三人申渡、加番之儀
者相止候由、然ル処平番之者者泊り番も相詰り候ニ付、同四辰
年閏正月初而御長屋御門番助役之者三人西久保組より新規ニ申
渡、同年八月台方五兵衛組筋より山崎甚三郎与申者壱人増人申
渡四人ニ相成、尤其節先役共より以来両組よりも壱人宛代り之
助役可申付旨申渡置候由ニ而、本役・助役とも打込泊り番相勤、
右甚三郎儀寛政二戌年十二月病気ニ付相勤不申候間、兼而申渡
置候通代り助役兵太夫組筋より成島弥市与申者申渡候処、弥市
儀同十一未年九月是又病気ニ付退役申渡、其節両組之内より猶
又代り可申渡筈之処西久保組之内より申渡、其後四人とも西久
保組ニ而相勤候得共、一躰助役之儀者天明度新タニ申渡、其節
前書之通五兵衛組筋より壱人全く新規ニ申渡候儀ニ而、西久保
組之者勤跡江申渡候儀ニ者無御座候間、以前之通壱人両組台方
之内より被　仰付被下候様右御長屋御門番奉願候義ニ御座候、
此段御尋ニ付猶又申上候、以上

御中間頭
小林五兵衛
神谷兵太夫

子九月

子十一月四日

一、御長屋御門番見習勤之儀、是迄之通小宮山作右衛門組より書出

候様、尤右ニ付以来之取極ニも相成候間、三名ニ而右之趣書面
を以申聞候様監物殿五兵衛江被仰渡候

子十一月七日監物殿江上ル

一、御長屋御門番助役之儀御内慮奉伺候処、右助役台方両組より者
不申渡、是迄之通小宮山作右衛門組西久保筋之者より可申渡旨、
御評決御内慮之趣奉承知候、以来右之通相心得可申候、此段申
上候、以上

子十一月　　御中間頭
小宮山作右衛門
小林五兵衛
神谷兵太夫

（朱書）
「四拾壱」

文化十三子年
子十月五日

御届申上候覚

私手前罷在候弟友三郎儀当子弐拾六歳罷成候処、去月廿一日夕
八半時頃不斗罷出其夜罷帰不申候ニ付、同廿二日早朝親類共方
并心当之所々相尋候処行衛一向相知不申候、尤平日身持不束成
儀も無之、猶又私江対し不和成儀等茂毛頭無之、何之筋ニ而出
奔仕候哉今以見当り不申候ニ付、此段御届申上候

高橋藤左衛門　印

兄高橋藤左衛門御届申上候通相違無御座候間、同様御届申上候

高橋藤八　印

組合高橋藤左衛門御届申上候通相違無御座候、此段以加判御届
申上候、以上

子十月五日　　高橋藤左衛門組合
大浜鉄之丞　印

神谷兵太夫殿

右十月五日月番組頭藤九郎持参差出候間、猶又無油断相尋否之儀
両三日申聞候様、且又外ニ過分之借金・出入ケ間敷義、或者書置
等も無之候哉相糺、其節是又以書付相届候様同人江申渡候

覚

私弟友三郎儀去月廿一日出奔仕候儀御届申上候処、猶又無油断
相尋候様被仰渡、且過分之借金・出入ケ間敷義、或者書置等も
無之候哉可申上旨奉畏候、然ル所是迄右様之儀承り不申書置等
も無御座、只今以行衛相知れ不申候、此段猶又申上候

高橋藤左衛門　印
高橋藤八　印

組合高橋藤左衛門并弟同藤八申上候通相違無御座候間、猶又加
判を以申上候、以上

子十月八日　　組合
大浜鉄之丞　印

神谷兵太夫殿

御中間高橋藤左衛門弟
出奔之儀申上候書付

月番　内藤隼人正
筒井佐次右衛門

覚

神谷兵太夫組御中間
藤左衛門弟
高橋友三郎
子弐拾六歳

右友三郎儀兄藤左衛門方ニ罷在候処、去月廿一日夕八半時頃風与罷出相帰り不申候ニ付、一類共其外心当り之所々相尋候得共、行衛相知不申旨相届申候間吟味仕候処、常々身持不束成儀も無之、藤左衛門江対シ不和成儀等も無御座、過分之借金・出入ケ間敷儀も不相聞書置等も無之、如何之筋ニ而出奔仕候哉心当り之儀曽而無御座候旨藤左衛門幷親類・組合一同申聞候ニ付、猶又無油断相尋候様申渡置候得共、只今以行衛相知不申旨申聞候、依之申上候、以上

子十月　　御中間頭　神谷兵太夫

右御目付扣共弐通例書添御部屋隆円を以差出候処、隼人正殿御受取被成候段申聞候、尤子十月八日差出

例書

柳田玖右衛門組
御小人
正木為吉甥
清水伝内

右伝内儀元田安御屋形奥口番相勤、病気ニ付御暇被下為吉方江引取差置候処、当子年二月五日逐電仕、三月七日御届書御月番隼人正殿江差出候処尋不被　仰付候

子十月八日出奔御届之儀以来とも左之通相心得、五役一同区々無之様申通し呉候様御部屋隆円を以差越ス

厄介ニ致し置候者ニ而も家元有之、具方ニ而相届候得者届ニ不及、続遠之者ニ而も先方無之厄介ニ致し置候得者、差置候方ニ而相届候事

右藤右（ママ）衛門弟出奔ニ付、御届等之振合組方ニ例も無之候間、両組向方等問合候処是又例無之、尤所々より出奔御届見合之為借受候ニ付、右一件一纏ニいたし袋ニ入置別帳書留は不致、入用之節者袋ニ有之候端書を出し可見合事

（朱書）「四拾弐」

文化十三子年
子十一月

御中間目付・御小人目付跡役伺書以来御逢之節者、名面書入候程明ケ、外ハ是迄之通相認、例之通扣共三通差出候様助右衛門殿被仰渡候ニ付左之伺差出候処、同十二月十二日書面之趣尤之筋ニも有之一同評議も相済候ニ付、前々之通相心得可申旨御同人小宮山作右衛門江被仰渡

御中間目付・御小人目付明キ之節、跡役江伺候者寛政以来御撰之上名面御下ケ有之取調差上来候処、以来右伺書名面明ケ置差出候様被仰渡候ニ付評議仕候処、右御撰之節者御差図次第取調候儀故、名面明ケ候伺書差上候迚同様之姿ニ者御座候得共、伺書之儀者私共名前ニ而差上候義ニ而、相伺候者之名前其頃一向不心得も何与歟不都合之儀ニも可有御座、且右之趣若組之者江流布仕候ハヽ、自然与私共役意薄キ様心取違之者も生し可申も難計、左候得者多人数之組御預ケ被置候儀、取締方ニも相拘可申哉奉存候、依之推量申上恐入候義ニ者御座候得共、若名面御下ケニ而者洩レ候与之御含より前文之通被仰渡候儀ニも可有御座哉、一躰

右跡役伺者勿論、都而組之者転役之伺書者私共何れも自身取調仕被仰渡相済候上ニ而書留等為仕候間、洩レ候筈者有御座間敷奉存候、併猶又厳重申合取扱可申候間可相成義ニ御座候ハヽ、只今迄之通名面御下ケ御座候様仕度奉存候、御趣意之程者不奉存候得共、組之者身分伺之儀頭共江御沙汰難被成趣ニ而者、私共取扱方不行届儀ニも可有御坐哉与一同心痛仕恐入奉存候間、此段御内慮奉伺候、以上

子十一月　　御中間頭
　　御小人頭

（朱書）「四拾三」

文化十四丑年

御届申上候覚

一、私実方兄御駕籠之者永野吉太郎儀、去月廿七日夜関口平七倅金次郎与申者ニ途中ニ巣鴨於仲町ニ出合、右金次郎同道仕於宅酒狂之上及口論ニ、其節大勢打寄打擲いたし并父平七・与市与申もの両人ニ而疵付逃去候ニ付、無是非帰宅いたし候、然ル処同晦日九ツ時頃平七儀吉太郎門前を罷通り又々及口論、平七宅江罷越同人倅金次郎江手疵を為負、途中ニ而長谷川丈助倅与市儀声を掛切付候ニ付立合、巣鴨於仲町右与市江三ケ所疵付候旨吉太郎申聞候ニ付、此段御届申上候、以上

文化十四丑年二月二日　　犬塚政之丞　印

神谷兵太夫殿

「右文中に明治期等の挟み込み文書あるも内容との関係なしと判断し翻刻を省略した」

御届申上候覚

一、巣鴨仲町小普請組朝比奈河内守組星野荘助地面之内借地住宅之前ニ而、御挑灯奉行長谷川丈助倅与市儀、昨晦日夕七時過手負罷在候ニ付、町方持ニ付自身番江引取申候、勿論借地地面前之儀ニ御座候間此段御届申上候、以上

二月朔日　　神谷喜平次　印
　　組合　小宮山佐太郎　印

神谷兵太夫殿

御届申上候覚

一、昨夜九ツ時過御見分相済候ニ付、御挑灯奉行長谷川丈助罷出倅与市儀引取相済候に付、此段御届申上候、以上

二月三日　　神谷喜平次　印

神谷兵太夫殿

見分之者
御徒目付
小川伊兵衛
高山喜六郎
御小人目付
長瀬平五郎
鈴木金十郎
御使之者
渡辺彦次郎
中川三五郎
黒鍬弐人名前相知不申候

右届書之分ハ何レも申上等不致承置候迄ニ候事

覚

実父隠居
永野又三郎
実兄
御駕籠之者
永野吉太郎

右両人共今三日四ツ時永田備後守殿御役宅江差出候様被仰渡罷出候処、御尋之上吟味中父子共揚屋江被遣候、依之此段御届申上候、以上

丑二月三日　　神谷兵太夫殿　　犬塚政之丞　印

丑二月四日御当番忠兵衛殿江御部屋隆円を以御扣共弐通差出、即日御附札を以御下知済

御中間押込之儀奉伺候書付　　花村忠兵衛

覚

神谷兵太夫組
御中間
犬塚政之丞

右政之丞実方兄御駕籠之者永野吉太郎幷実父隠居永野又三郎義、昨三日永田備後守於御役宅御吟味中揚り屋江被遣候、依之政之丞儀押込置可申哉奉伺候、以上

丑二月四日　　御中間頭
神谷兵太夫

御附札
「番遠慮可被申渡候」

右周防守殿被仰渡候段諸左衛門殿御立合左京殿被仰渡

丑十月四日御扣共弐通御当番金右衛門殿江差出、即日御附札を以植村駿河守殿被仰渡候段、忠兵衛殿立合金右衛門殿被仰渡

御中間御番遠慮被　仰付罷在候者　　森川金右衛門

此上之儀奉伺候書付

覚

神谷兵太夫組
御中間
犬塚政之丞

右政之丞実方兄御駕籠之者永野吉太郎幷実父隠居永野勝助（ママ）儀、御吟味中揚屋江被遣候ニ付政之丞押込伺当二月四日差出候処、番遠慮可申渡旨被仰渡候、然ル処昨三日永田備後守於御役宅吉太郎儀軽追放、勝助儀江戸払被　仰付候ニ付、政之丞此上之儀奉伺候、以上

丑十月四日　　御中間頭
神谷兵太夫

御附札
「番遠慮可被申渡候」

丑十一月七日駿河守殿御渡之旨与左衛門殿立合八十郎殿被仰渡

御目付江　　御中間
犬塚政之丞

番遠慮可被差免候

（朱書）
「四拾四　四拾七番見合之事」

文化十四丑年

御目付衆

服部伊賀守
古川山城守
岸　彦十郎
勝　桓兵衛

一、御徒目付組頭部屋
一、田安御門外弓馬稽古所
一、新土戸番
一、二丸御長屋御門
一、二丸御台所脇御長屋御門
一、御風呂屋口御番所
一、二丸塀重御門番所
一、二丸御小人目付部屋
一、二丸御小人御使部屋
一、浜御殿御小人目付泊部屋

右之ケ所〳〵灯し油御倹約御年限中夫々相減御受取之積、御支配向差出候書付御添被御申上候書面、去ル申年十一月植村駿河守殿被成御渡候ニ付漆奉行江申渡、右御支配向差出候書付之趣を以是迄渡し方為致候、然ル処去暮御書付之趣も有之候ニ付、右油之儀申年以前之通受取候心得之旨、御徒目付組頭より漆奉行江懸合候ニ付、左候ハ、其段元御断書御進達有之候様致度旨及挨拶候処、灯油之儀ニ付御断差出候義も無之、去暮之御書付ニ基附受取候事ニ候得者、子細無之儀ニ付御断者差出不申候間、申年以前之通渡方難相成候ハ、、右之趣拙者共より各様江及御達候様致度旨、再応御徒目付組頭より懸合申聞候段漆奉行申立候、右者先達而及御達候通平常倹素を相守、其有余を以非常之備等ニいたし候心掛可申者勿論之儀ニ付、御倹約之儀申年以前之姿ニ復し候迚、諸品位下ケ等ニ而差支無之分迄も以前之品合ニ復し候ニ者不及旨、大炊頭殿被仰渡も有之候間、右油之儀も諸品位下ケ等之趣ニ准、升数相減候儘居置候而も差支無之儀ニ候ハ、、是迄之升数ニ而御居被置候方与存候間、御勘弁之上否被御申聞候様存候、尤是迄之通居置候積候得共、別段被御申上ニ者不及候得共、前文ケ条之内実々引足不申差支候分も有之、当丑年より以前之通相増不申候而者難相成ケ所も有之候ハ、、其段被御申上候様存候、且右御懸合中油渡方無之候而者御差支ニ相成候ハ、、先ツ是迄之升数ニ而渡方いたし置、追而御懸合往復治定之上増減差引致候積漆奉行江申渡候間、其段御徒目付組頭江も被御申渡候方与存候、依之及御懸合候

丑三月

右三月二日隼人正殿被遣候旨当番所杉崎惣兵衛より差越候間、夫々相糺候処いつれも是迄油引足り不申候処、作略を以漸御間ニ合候義ニ付、申年以前之通受取度旨申出候間、右之趣惣兵衛江申談、尤右書面江ハ当番所組頭より下ケ札ニ而申上相済候由ニ有之候処、此方差支之始末書取差出候様右惣兵衛より尚又談ニ付、同十二日左之書取同人江遣ス

一、新土戸番
一、二丸御長屋御門
一、二丸御台所脇御長屋御門

右三ケ所御用油之儀、去ル申年格別之被仰渡も御座候ニ付、長短

合数之内五才ツ、相減、灯明り厚薄ニ不拘勘弁仕御用立せ候、
全くハ引足不申候段兼而勤番之者共申立候得共、御年限中別段
難申立候ニ付尚又精々申渡置候ニ付、此度申年以前之通五才宛
増相渡候様仕度候

三月　　御中間頭

申年差出候書面写

一、御長屋御門
一、新土戸番
一、二丸御長屋御門
一、二丸御台所脇御長屋御門
右四ケ所御用油之儀先年より追々御減有之、寛政元酉年御減之
節より九月より正月迄一夜ニ付七勺五才宛、二月より八月迄六
勺五才宛ニ相成、此上減方無御座候得共此度格別被仰渡御座候
ニ付、猶又勘弁此上五才相減候様可仕候
但御長屋御門番之儀者、夜中御断も度々有之場所ニ付是迄之
通居置申度、残り三ケ所者五才ツ、相減可申候
一、奥表仕切土戸番
一、御太鼓櫓下土戸番
右弐ケ所者長夜之節三勺七才五毛、短夜之節三勺弐才五毛ツ、
ニ而半夜分御座候に付、此上減方無御座候
一、大奥御台所前御長屋御門
一、同裏締戸番
一、二丸御広敷前御長屋御門
一、同裏締戸番
右四ケ所者長夜之無差別平均一夜ニ付六勺ツ、受取候場所ニ
付、是又此上減方無御座候
右之通御座候、以上

申十一月　　御中間頭

（朱書）
「四拾五」
文化十四丑年

覚

今暁八時前盗賊忍入候様子ニ而致物音候間、目覚起出家内様子
見候処、玄関戸締有之候処固辞放有之候ニ付所持之品改見候処、
左之品紛失仕候

一、脇差　長　壱尺五寸程　壱腰
無銘　錆身
但木柄　胴銅附
縁頭　同断
切羽・鎺　金焼附
鍔　鉄丸
鞘　黒塗、胴銅物附
鵐目無之
下ケ緒　茶糸
小柄無之
一、桟留三筋立縞、中裁布子、裏木綿継々　壱ツ
一、木綿四分一縞、袖無之小裁羽織　壱ツ

右之品々紛失仕候処、今朝隣町木村嘉藤次拝領地面内ニ右品々之内袖無之羽織捨有之候ニ付、嘉藤次江対談之上右羽織者引取申候、嘉藤次方よりも組役迄口上ニ而相届候旨申聞候、尤町触者相願不申候、依之此段御届申上候、以上

三月九日　　組合　羽田市蔵　印
　　荒井覚之助　印

神谷兵太夫殿

宿所本郷金助町　柳田玖右衛門組
右之通御座候、以上　木村嘉藤次

三月十日　羽田市蔵

三月十一日御扣共弐通御当番与左衛門殿江差出

覚

宿所拝領屋敷　神谷兵太夫組
本郷春木町三丁目　御中間　羽田市蔵
右市蔵宅江一昨九日暁八時頃盗賊忍入被盗取候品々左之通

一、脇差　長サ　壱尺五寸程
　身　無銘　壱腰
　但木柄　胴銅附
　縁頭　同断
　切羽・鎺　金焼附
　鍔　鉄丸
　鞘　黒塗、胴銅物附
　鵜目無之
　下ケ緒　茶糸
　小柄無之

一、桟留三筋立縞、中裁布子、裏木綿継々　壱ツ

一、木綿四分一縞、袖無之小裁羽織　壱ツ

右之通紛失仕候処、一昨九日朝本郷金助町柳田玖右衛門組御小人目付木村嘉藤次拝領屋敷之内ニ、右品之内袖無之羽織壱ツ捨有之候ニ付、嘉藤次江対談之上右羽織者引取候由申聞候、尤町触等者相願不申候旨市蔵相届申候、依之申上置候、以上

三月十一日　御中間頭　神谷兵太夫

覚

去ル九日御届申上候紛失物之内脇差壱腰、聖堂馬場脇御給金辻番廻り場之内捨有之候ニ付、私所持之品ニ相違無御座候間請取度旨今朝受負人江懸合候処、只今御当番御目付衆より御小人目付吉沢嘉一郎右辻番所江参り、脇差壱腰主羽田市蔵方より証文取之相渡可申旨被仰渡候趣ニ而、右辻番所受負人坂田屋八郎兵衛・下野屋三九郎持参仕候ニ付、則書付差遣脇差受取申候、尤拵之儀者去ル九日御届申上候通御座候、依之此段御届申上候、以上

三月十二日　　羽田市蔵　印

神谷兵太夫殿

三月十三日御扣共弐通当番八十郎殿江御部屋宗閑を以差出

覚

神谷兵太夫組
御中間
羽田市蔵

右市蔵宅江去ル九日暁八時頃盗賊忍入紛失之品々一昨十九日御届申上候処、右品之内脇差壱腰聖堂馬場脇御給金辻番廻場之内ニ捨有之候ニ付、受取度旨市蔵より右辻番所受負人江懸合候処、昨十二日御小人目付を以主方より証文取相渡可申旨御差図之趣ニ而、右請負人坂田屋八郎兵衛・下野屋三九郎方江書付差出、脇差受取候段市蔵相届申候、依之申上候、以上

三月十三日

御中間頭
神谷兵太夫

（朱書）
「四拾六」

文化十四丑年

丑三月十三日佐次右衛門殿御下ケ有之、夫々糺之上下ケ札いたし返上

御目付衆

永田備後守
岩瀬加賀守
古川山城守
服部専蔵

御中間山本吉右衛門儀、巣鴨原町弐丁目之内拝領屋敷弐ケ所、上り高引当を以去閏八月中町会所金貸附候処、右地面江貸長屋相建、上り高相増候訳を以貸増之儀願出幷同町之内同人拝領町屋敷壱ケ所地代上り高引当、此度新規貸附相願候段右家守共願出候間取調候処、右吉右衛門義右之外ニも同町之内ニ而四ケ所拝領町屋敷与申立、是迄追々町会所金貸附置候ニ付、右躰数ケ所拝領屋敷有之訳、右町名主伊右衛門町会所江呼出相糺候処、右町内之儀者不残前書御中間三拾五人分大縄拝領屋敷ニ有之、内三ケ所者銘々拝領主有之候得共、残り三拾弐ケ所者御中間組惣躰之拝領地面ニ而壱人別ニ拝領主無之、右地面上り高を以組入用ニ可致地所ニ有之由、然ル処前書吉右衛門拝領屋敷之由を以、追々申立候七ケ所之地面も組入用ニ可相成、三拾弐ケ所之内ニ而右吉右衛門引受地面ニ有之由、然ル上者右之趣を以貸附可相願之処、同人拝領屋敷与申立候段心得違恐入候旨申立候ニ付、右貸附金遣方之儀相尋候処、右者貸長屋向修復入用ニ相成候趣ニ有之、尤貸附年限中引受人相替候節者、名前書替相願候心得之旨申立候間致勘弁候処、右之内三拾弐ケ所者拝領主無之、御中間組一躰江被下候地面ニ候上者、右吉右衛門壱人之名前ニ而者貸付相成兼候儀ニ付、吉右衛門組合其外組中連印為致候而貸附可申与存候、右之趣ニ而差支之筋も無之候哉否被御申聞候様致度、此段及御掛合候

丑三月

書面御中間山本吉右衛門儀、巣鴨原町弐丁目之内拝領屋敷之旨申立、上り高引当を以町会所金貸附相願候儀ニ付、御掛合之趣相糺候処、一躰右町屋敷之儀書面之通御中間大縄拝領地面ニ而、私組方之分前々より三拾弐人分ハ拝領主無之、右之分家守附置町人共江貸置、地面上り高を以組入用ニ仕候場所ニ有之、当時右吉右衛門江地面引請世話為仕候義ニ御座候、然ル処貸長屋向大破ニ付、修復為入用前々之仕来を以拝借相願候旨、吉

右衛門江家守共より申出候由ニ而取調之上仕来之儀相違も無之候間、願之通申渡候段同人申立候、尤町会所江吉右衛門拝領屋敷之旨申立名主被召呼御糺之処、同人引受地面ニ有之候を拝領屋敷与申立候段心得違恐入候旨申立候趣等者全家守共之取計ニ而、吉右衛門儀者一向不奉存候段是又申立候、依之尚又得与相糺候処、右大縄町屋敷之儀者場末ニも有之、過半明キ地ニも相成居候得共一躰町屋敷之事故公役・町入用等相掛り住居仕居候者少く、是迄之上り高至而少分之儀ニ有之、此上貸長屋大破之処御貸付金相成兼候様罷成候而者、困窮之者計ニ而修復可仕手段も相成兼候義ニ付、吉右衛門幷組役之者連印ニ而御貸附御座候様仕度段申立、右町名主伊右衛門幷家守共よりも願之通御貸附相済候様、然ル上者万々一類焼其外如何様之儀出来仕候共、無遅滞急度上納仕候趣連印を以願出候間、前文之通吉右衛門幷組役之者連印ニ而御貸附御座候様仕度、此段以下ケ札申上候、且吉右衛門儀者寿平与改名仕候、以上

丑三月　　御中間頭　神谷兵太夫

一、巣鴨用金地ニ而町会所金借受候儀是迄頭江者不申聞、引受之賄役手切ニ而承届借受させ候段山本吉右衛門申立候得共、一躰頭江不申聞取計候段仕来与者乍申不行届義、以来右躰之儀無之様申渡置候事

御本文拝見仕候、家作大破ニ付修復為入用会所金先々仕来を以相願候旨申聞候に付先役江も承合候処、家主共申聞候通相違無御座候ニ付願之通申渡候、其刻不奉伺候段奉恐入候　　山本寿平

原町用金地地借左之通

三分	弥市郎	
同	文次郎	
同	熊三郎	
同	権六	
同	久右衛門	
壱両弐分弐朱	仁助	
三分	利兵衛	
同	甚兵衛	
同	奥松	
同	万宝院	
壱分弐朱	杢兵衛	
弐分	番家	

〆金九両壱分之上り高

右之内ニ而
金四両　名主給
金壱両　家守給

町入用凡三両余懸り、全く用金納高壱両程

右之通御座候、以上

三月十五日　　山本寿平

以書付申上候

一、御地面之内下家主共儀、店賃上り高引当町会所貸付金御願申上

候、其節山本寿平様御拝領屋敷与申立候処、去ル子十一月右六ケ所拝領地之由会所より御尋候付、其節御組役様御引請与申立候得者、先達而拝領御地面与申上候儀不調法与申上候処、右間違之儀奉恐入候、書付町会所江差出候義寿平様江不申上、私共より申上候義ニ御座候、此段申上候、以上

丑三月　　家主　治左衛門　印

御役人中様

是迄町会所金借受候者何々ニ而、金高等も委細認出し候様申渡候処左之書付出ス、尤右御貸付金之儀者治左衛門借受候義ニ者無之、其場所々々家主共江借受候旨申聞候事

覚

享和三年亥七月初り　　家主　利兵衛
文化五年辰九月
文化十一年戌二月
一、金弐拾八両
同断
一、金八両　　権六
文化十二年亥十月初り
一、金弐両　　奥松
文化八年未五月初り
文化十三子年閏八月
一、金拾八両　　弥市
同
一、金拾五両　　藤次郎
同
一、金拾五両　　清左衛門
〆金八拾六両也

丑三月　　治左衛門　印

右之通是迄借受罷在候段申立候事

乍恐以書付奉願上候

一、巣鴨御組屋敷惣地守治左衛門奉願上候、私義祖父治左衛門代より数年御地面地守被　仰付支配仕来候、尤ケ所多ニ付下家主附置世話為致候処、場末ニ付見世商売等も無御座、出商売而已ニ而漸取続罷在候間、家作修復等仕候義も相成兼候、依之前々より会所金拝借仕候ニ付、山本寿平様御支配相成候而も御地主之積を以会所金奉願候処　御奉行所様より御頭様江御懸合有之候旨、寿平様より被仰聞奉恐入候、然ル処去子十一月家作建増仕候ニ付、会所御貸附金願出候処御見分も相済候間、何卒願之通御貸付相済候様御達被下置候様偏ニ奉願上候、右願之通被　仰付候上者、万一類焼等其外如何様之義出来仕候とも、是迄拝借仕居候分者勿論、此度御貸付ニ可相成会所上納金幷御地代金共毛頭無遅滞急度上納仕、縦令御支配人御替り被成候共相違仕間敷、且又御組御用金地之儀故万一非常之儀有之御金御入用之節者、会所金私共江拝借仕候事故、右様之節御差支ニも相成候段被仰渡候趣御尤之御儀奉存候、依之若御組御用金御入用之節者、会所御貸附有之候御地面七ケ所共、壱ケ年分之御地代御入用丈ケ取越相納候様仕、少も御用之御差支無之様可仕候間、願之通被仰付被下置候様以書付奉願上候

巣鴨原町家主惣代
治左衛門　印
加判人
利兵衛　印

家主惣代治左衛門奉願候通り被　仰付被下置候様奉願上候、願之通被　仰付候上者町会所上納金幷御地代等迄無間違急度上納為仕、御組御用金御入用之節之儀、右治左衛門申上候通是又相納候様為仕、少も御苦労相掛申間敷候、為其奥印を以申上置候、以上

文化十四年丑三月

名主
伊右衛門　印

神谷兵太夫様御組
御役人中様

御請

此度町奉行・御勘定奉行より御掛合御座候者巣鴨屋敷地守・名主より御貸付金奉願候節、是迄同役之内屋敷掛壱人之奥印仕相済来候処、同役一統奥印仕候而も差支無之哉御尋御座候、賄役一同申合奥印仕候而も差支候義無御座候、依之申上置候、以上

丑三月

岩掘孫次郎　印
伊沢善之丞　印
松坂藤次郎　印

神谷兵太夫殿

（朱書）
「四拾七　四拾四番可見合」

文化十四丑年

丑四月朔日吉右衛門殿御下ケ之旨西丸御徒目付組頭堀越又右衛門より差越、下ケ札いたし返却

西丸御目付衆

服部伊賀守
古川山城守
岸　彦十郎
勝　桓兵衛

一、西丸御徒目付組頭部屋
一、同御長屋御門
一、同御台所前御番所
一、同御納戸口前御番所
一、同奥表仕切御門
一、同御広敷御長屋御門
一、同御風呂屋口御番所

右之ケ所〳〵灯油御倹約御年限中夫々相減御受取之積、御支配向差出候書付御添被御申上候書面、去ル申年十一月植村駿河守殿被成御渡候ニ付漆奉行申渡、右御支配向差出候書付之趣を以是迄渡方為致候処、当丑年より者申年以前之通御請取之積ニ有之候得共、右者御差支無之儀ニ候ハヽ是迄之合数ニ而御居置候様ニ者相成間敷哉、御勘弁之上否被御申聞候様存候、尤是迄之通居置候得者別段被御申上候ニ者及不申候得共、前文ケ所之内実々引足不申差支候分も有之、当丑年より以前之通相増不申候而者難相成ケ所も有之候ハヽ、其段被御申上候様存候、且右御懸合中油渡方之儀者先是迄升数ニ而渡方いたし置、追而御掛合往復治定之上増減差引いたし候積漆奉行江申渡置候間、其段御承知可被成候、依之及御掛合候

丑四月

書面西丸御長屋御門・同御台所前御番所・同御納戸口前御番所・同奥表仕切御門・同御広敷御長屋御門右五ケ所御用油之儀、去申年格別之被仰渡も御座候ニ付、長短合数之内一夜壱ケ所ニ付五才宛相減、灯し方勘弁為仕候得共全く引足り不申候段兼而勤番之者共申立候得共、御倹約御年限中別段難申立候ニ付、此度より申年以前之通五才ツ、増相渡候様仕度候

丑四月　　御中間頭

右取調ニ付申年取扱向為見合写置左之通

申十月十三日丹下殿川村助左衛門を以御下ケ、同廿八日下ケ札いたし返上

御目付衆　　柳生主膳正　肥田豊後守　篠山十兵衛

御支配向之内江油渡ケ所

桜田御用屋敷　御徒目付組頭部屋

右御用油御徒目付組頭渡

御長屋御門幷新土戸・奥方仕切土戸・御太鼓櫓下土戸・大奥御台所前御長屋御門・同裏締戸番所・二丸御長屋御門幷御台所脇御番所・二丸御広敷御長屋御門

右御用油御中間頭渡

右之外黒鍬頭持・御小人頭持之ケ所ハ留略ス

右口之油此節迄減方無之、前々之通御受取有之旨漆奉行申立候、右者先達而諸向一統江被仰出候御倹約之趣を以減方之儀御申上有之、可然与存候ニ付未御申上無之候ハヽ、早々減方有無御取調被御申上候様存候、此段及御達候、以上

申十月

一、御長屋御門　一、新土戸　一、二丸御長屋御門

一、二丸御台所脇御長屋御門

右四ケ所御用油之儀先年より追々御減有之、寛政元酉年御減之節より九月より正月迄一夜ニ付七勺五才ツヽ、二月より八月迄六勺五才ツヽ、相成、此上減方無御座候得共此度格別之被仰渡御座候ニ付猶又勘弁仕、此上五才宛相減候様可仕候

但御長屋御門之儀者夜中御門断も度々有之候場所ニ付是迄之通居置申度、残り三ケ所者五才ツヽ、相減可申候

一、奥表仕切土戸番　一、御太鼓櫓下土戸番

右弐ケ所者長夜之節三勺七才五毛、短夜之節三勺弐才五毛ツヽニ而半夜分御座候ニ付、此上減方無御座候

一、大奥御台所前御長屋御門　一、同裏締戸番

一、二丸御広敷御長屋御門　一、同裏締戸番

右四ケ所者長短夜之無差別平均一夜ニ付六勺ツヽ、請取候場所ニ付、是又此上□(減カ)方無御座候

申十月　　御中間頭

申十月十二日西丸主膳殿河合儀左衛門を以御下ケ、同廿八日下ケ札いたし返上

西丸御目付衆　　柳生主膳正　肥田豊後守　篠山十兵衛

御支配向之内油渡ケ所
一、西丸御長屋御門
一、西丸御老中口土戸并御台所前引戸其外奥方仕切土戸
一、西丸御広敷御長屋御門
御中間頭渡
末文言前同様ニ付留略ス
申十月
一、西丸御長屋御門
一、同御台所前御番所
一、同御納戸口前御番所
一、同奥表仕切御門
一、同御広敷御長屋御門
右五ケ所御用油之儀先年より追々御減有之、寛政元酉年御減之節より九月より正月迄一夜ニ付七勺五才、二月より八月迄六勺五才宛相成、此上減方無御座候得共此度格別之被仰渡御座候ニ付猶又勘弁仕、此上五才ツヽ相減候様可仕候
御中間頭

（朱書）「四拾八」
文化十四丑年
丑八月七日御月番隼人正殿江差出
御中間屋敷奉願候書付
月番　内藤隼人正
土方八十郎
覚

神谷兵太夫組
御中間
武藤重兵衛
右重兵衛養父武藤金五郎儀、寛政二戌年八月小普請より駿府勤番同心被　仰付、彼地江引越候節拝領屋敷上り地ニ相成、文化三寅年九月御先手同心被　仰付駿府より御当地江罷越候処、病気ニ付奉願御目付支配無役罷成、同五辰年十二月重兵衛江家督被下置御中間江御入人被　仰付相勤罷在候処、無□（屋カ）敷ニ而借地仕罷在、軽キ者之儀ニ候得者難義仕候間、何卒相応之屋敷被下置候様仕度奉願候、右之通相願申候間願之通屋敷拝領為仕度奉願候、以上
丑八月
御中間頭
神谷兵太夫

例書
覚
笠原五太夫組
御小人
牛越久平
右久平儀寛政三亥年四月日光奉行同心被　仰付、彼地江引越候ニ付拝領屋敷差上候処、同五丑年正月御小人江帰番被　仰付、無屋敷ニ御座候間相応之屋敷被下置候様同年八月奉願候処、翌寅年七月場所見立相願可申旨立花出雲守殿被仰渡候
丑八月
文政二卯十一月六日紀伊守殿御書付源六郎殿御渡之旨杉崎惣兵衛

より相達承付返上
御目付江

御徒目付
福岡半十郎
表火之番
中島亀之助
石川五助
荻野八百吉
御中間
武藤重兵衛
黒鍬之者
西山与五郎
都筑勇次郎
田中助七
木村多三郎
田中庄八
中村庄蔵
御掃除之者
渡辺弥助
高坂源四郎
田中松吉
大塚政五郎
馬場作次郎
杉山長四郎
馬場幸吉
小高平助
野村与兵衛
荒川勝次郎
松村亀太郎
栗山丈助
山崎甚次郎
岡島清吉
矢野沢松之助
町田平右衛門

内野利兵衛
内野為吉

右願之通屋敷被下候、所者見立願候様可被申渡候

酉正月十四日御扣共弐通差出　絵図面弐枚添
御中間屋敷奉願候書付　月番　大草主膳　酒井作右衛門

覚

鈴木宇右衛門組
御中間
武藤重兵衛

右重兵衛義拝領屋敷無御座候ニ付、巣鴨松平大膳太夫上地之内新御番丹羽五左衛門組大原利兵衛御預地面、別紙絵図面之場所四拾坪程之処被下置候様仕度奉願候
〔朱書〕「文政二卯年十一月願之通屋敷被下候、所者見立相願候様紀伊守殿被仰渡候」
以上
酉正月　御中間頭　鈴木宇右衛門

例書

柳田玖右衛門組
御掃除之者
寺島藤吉
外　三人

右四人浜町之内松島町名主五郎兵衛預地拝領仕度旨文政五午年十一月奉願候、書付弐通・絵図面弐枚添御月番羽太左京殿・御手洗五郎兵衛殿江差出申候、以上

申九月

右例書者不差出候得共為見合留置

御中間頭
鈴木宇右衛門

ここに挿入図あり（巻末参照）

（朱書）
「四拾九」

文化十四丑年

覚

私差料之大小昨十一日夜紛失仕候間御届申上候、拵左之通

刀

一、身　因州住兼先、長サ鍔元迄弐尺四寸余
一、鞘　黒呂色（蠟カ）
一、鵐目　赤銅
一、下ケ緒　こけ茶
一、切羽・鏂　金ノ厚着せゆふ女屋（ママ）すりめ（鑢目カ）、尤弐枚鏂
一、鍔　鉄、㊀此形之彫
一、縁　赤銅七々子
一、頭　ぬり角
一、鮫　白
一、目貫　金五七ノ桐三ツ並裏表
一、柄糸　黒

脇差

一、身　河内守正久、壱尺七寸余
一、鞘　黒呂色
一、鵐目　赤銅
一、下ケ緒　こけ茶
一、切羽・鏂　金ノ厚着せ、但切廻し
一、鍔　鉄、二タ葉葵之彫
一、縁　赤銅七々子
一、鮫　白
一、目貫　金ノ焼附、色さめ、形不分
一、頭　ぬり角
一、柄糸　黒

小柄

一、赤銅七々子、金銀赤銅、波ニ虹の高彫
一、小刀　武蔵太郎安国
一、大小袋之儀者隣家勝屋勇吉屋敷内ニ捨有之候ニ付、先ツ勇吉方ニ而預り置候段申聞候、此段も申上候

右之通御届申上候、以上

丑八月十二日

武藤重兵衛　印

神谷兵太夫殿

別紙

糀町弐丁目北横町

御書院番高井但馬守組
塩入大三郎屋敷長屋
借地住宅
武藤重兵衛
隣家
大御番水野遠江守組
勝屋勇吉

覚

糀町弐丁目北横町御書院番高井但馬守組　神谷兵太夫組
塩入大三郎屋敷之内借地住宅仕罷在候　御中間　武藤重兵衛
右重兵衛宅江一昨十一日夜盗賊忍入候様子ニ而差料之大小紛失
仕候、拵左之通

一、刀　壱腰
身　長サ弐尺四寸余
銘　因州住兼先
鞘　蠟色
鵐目　赤銅
下ケ緒　こけ茶
切羽・鏰　金厚着祐乗鈩（ママ）（鑄カ）、但弐枚鏰
鍔　鉄、透シ彫
縁　赤銅七々子
頭　塗角
鮫　白
目貫　金　五七ノ桐三双
柄糸　黒

一、脇差　壱腰
身　長サ壱尺七寸余
銘　河内守正久
鞘　蠟色
鵐目　赤銅
下ケ緒　こけ茶
切羽・鏰　金厚着せ、但切羽切廻し
鍔　鉄、弐葉葵彫
縁　赤銅七々子
頭　塗角
鮫　白
目貫　金焼附、形不分
柄糸　黒
小柄　赤銅七々子、色絵浪ニ虹の高彫
小刀　武蔵太郎安国

右之通紛失仕候ニ付町触之儀奉願候旨重兵衛申聞候間、町奉行衆江御達被下候様仕度奉存候、尤右大小袋之儀者隣家大御番水野遠江守組勝屋勇吉屋敷内ニ捨有之、同人方ニ預り置候段申聞候旨是又重兵衛相届申候、依之申上候、以上

丑八月十三日　御中間頭　神谷兵太夫

右御扣共三通差出候処、町触之儀者町奉行方ニ而余程手数も懸り不容易事之様及承候間、若例等も有之候ハ、承り度旨御部屋立益申聞候間取調候処、五役之方ニ而者差当り類例無之ニ付当番所承り合候処、文化元子年九月八日暁御徒目付中井保兵衛居宅江盗賊忍入被盗取候品々御届申上、町触之儀奉願候書付同十一日差出、其儘同十四日御当番次左衛門殿江差出候旨書留有之候ニ付、右例相認

立益江差遣候処、右之趣常次郎殿江可申上旨申聞、翌十四日小林五兵衛当番之節立益申聞候者、右紛失物町触願之儀町奉行江御掛合有之候処無差支相済候ニ付、以来見合せ之ため此例聢与御部屋江も留置候間、手元江も留置候様同人申聞、且又右町触之儀町奉行所主役之事故表向差支与申ニ者無之候得共、町触出し候上者其品ニ似寄候得者、何ケ月之間ともなく都度々々町奉行所江持出候間、被盗候もの同様幾度も呼出しニ相成、其上若品出候とも大小之類者多分散々ニ出候趣之由、夫故向々ニ而も多分町触者不相願哉ニ相聞、被盗候ものも度々罷出候ニ付而者附添之もの・自分支度等之入費も相掛り却而困り候様成趣、又町奉行所ニ而も臨時ニ与力・同心取扱も懸り、其上元のもの元の如くニ戻り候与申ニも無之、別而大小抔者前文之通り相聞、尤重代之品又珍器与申物歟、或者定紋付之衣類等数品与歟申候得者戻候義も可有之哉、以後右之含を以取扱可然哉、無急度噂申聞候段小林五兵衛より申越候之事

覚

一、私大小袋勝屋勇吉方ニ而留置候処、御小人目付天笠重平・松永林平見分之上私方江受取候様申聞候ニ付請取申候、依之此段御届申上候、以上

八月十五日　　武藤重兵衛　印

神谷兵太夫殿

覚

神谷兵太夫組
御中間
武藤重兵衛

右重兵衛宅江去十一日夜盗賊忍入候様子ニ而差料之大小紛失仕候ニ付、町触之儀奉願候節申上候右大小袋之義、隣家大御番水野遠江守組勝屋勇吉屋敷内ニ捨有之、同人方ニ預置候処御小人目付見分之上受取候様申聞候ニ付、書付差出受取候段重兵衛相届申候、依之申上候、以上

八月十六日　　御中間頭
神谷兵太夫

右者最初町触之義申上候節右之訳書入差出候間、此申上も其儘町奉行所江可被遣義与存候ニ付、御扣共弐通口上添御当番八十郎殿江御部屋隆円を以差出候処、其通ニ而相済候事

八月廿一日左京殿御下ケ被成候旨小野伝左衛門より写差越候ニ付、承付いたし同人江遣ス

先達而御断有之候神谷兵太夫組御中間武藤重兵衛方ニ而紛失似寄之品見せ可申候間、明廿二日四半時拙者御役所江右重兵衛差出候様御申渡可有之候、以上

八月廿一日　　永田備後守

書面武藤重兵衛明廿二日四半時永田備後守御役所江差出可申旨被仰渡奉承知候

八月廿一日　　御中間頭
神谷兵太夫

右ニ付重兵衛組合之内壱人差添罷出候様申渡候事

覚

一、今廿二日四半時永田備後守御役宅江罷出候処、去十一日夜紛失

仕候私差料大小吟味之上出候ニ付、吟味中預り置候様申聞候ニ付、預り書面差出請取罷帰申候、依之此段御届申上候、以上

八月廿二日　　武藤重兵衛　印

神谷兵太夫殿

八月廿三日壱通御当番忠兵衛殿江差出

覚

神谷兵太夫組
御中間
武藤重兵衛

右重兵衛儀昨廿二日四半時永田備後守御役宅江呼出ニ付差出候処、去十一日夜紛失仕候重兵衛差料之大小吟味之上出候ニ付、吟味中預り置候様与力を以被申渡候ニ付、預り書面差出右大小請取罷帰候段相届申候、依之申上候、以上

丑八月廿三日　　御中間頭
神谷兵太夫

「(朱書)右一件翌寅二月廿二日落着相成右大小受取相済、預り書面与力より相返し候段重兵衛届出候ニ付、其趣申上書差出候事、但右申上書ハ留略ス」

(朱書)「五拾」

文化十四丑年八月十八日

小普請組
諏訪隼人支配
三河口雲八郎

元高現米弐拾石
七人扶持

右此度御徒目付被　仰付候ニ付、過扶持弐人扶持者高々給御証文願差上候、元済相分兼候ニ付表御右筆所より問合候処左之書面差越候間、御勘定奉行江茂及御掛合候処附札いたし差越候

宝暦六子年

書面御扶持方高給之儀、申年相定り候通向後弥相心得可申旨承知候

子五月六日　　中山遠江守

去月晦日石見守殿被仰渡候弐拾俵三人扶持之場所江拾五俵四人扶持之者被　仰付候節、過扶持取計之儀ニ付存寄可申上旨被仰渡、何れも評議仕左ニ申上候

一、去ル酉年已来、小普請より御入人之者持扶持場所より高過扶持ニ而も高給ニ不仕持扶持之儘ニ而御足高相渡、御役替之者者前々之通場所高より過扶持之分者高給仕候儀、只今迄仕来候得共両様ニ而紛敷御座候間、御役替又者小普請より御入人共去ル申年神尾若狭守伺之上相極置候通、向後場所高より持扶持過候分者高給仕可然奉存候、書替奉行江も相尋候処右之通申聞候、依之奉伺候、以上

五月

右書付子八月八日宮内少輔殿御下ケ之旨差越候間掛合候処、附札いたし差越候

御書面之趣差当り書留相見え不申候、然ル所当時取計候書替所書留ニ見合候得者右書面之趣ニ而宜候間、左ニ御定書書抜差進申候

宝暦二(ママ)酉年

一、場所並之御扶持方より持扶持過候分御足高ニ
而御入人被　仰付候節、持扶持過候分者御足
高給不足之分御足高被下候
九月　古川山城守

右之通ニ候間已後為見合記置候事
丑九月　土方八十郎

(朱書)「五拾壱」

文化十四丑年
丑十一月五日
今五日　右大将様　御本丸江被為　成候節、御駕籠御注進継
手罷出候処途中ニ而腹痛仕　御本丸当番所江不申上候段不調法
奉恐入候
神谷兵太夫組
御中間
十一月五日　内山平八

右者西丸当番所江差出候段御供組頭林蔵申聞右書付写差越、翌
六日但馬守殿より奥向江被仰込候処奥向ニ而差支も無之候間、
先此度者押込ニも不及、已来右様之儀無之様一同申合、入念可
申旨但馬守殿堀越又右衛門江被仰渡候旨、同人より組頭定蔵へ
申渡有之候段申聞相済候事

(ミセケチ)「(朱書)「五拾弐」

文化十四丑年
丑十一月八日
覚

松坂藤次郎
山崎孫三郎

右者昨夜四ツ時本郷丸山隣家山田富蔵地面より出火仕、居宅不
残類焼仕候ニ付申上候、以上
十一月八日　岩堀孫次郎
伊沢善之丞

右届書差出ス」

(朱書)「五十弐」

御中間押込伺
森川金右衛門

覚

御中間大縄之内拝領屋敷
本郷丸山台町
小宮山作右衛門組御中間
定番之者
山田富蔵

右者富蔵地面之内道心者全光宅より昨七日夜四半時頃出火仕類
焼之者茂有之候間、富蔵儀押込置候様可仕候哉奉伺候、以上
十一月八日　御中間頭
小宮山作右衛門

右御扣とも弐通御当番金右衛門殿江差出候処
御附札
(朱書)「出火」遠慮可被申渡候

右即日近江守殿被仰渡候段御立合無之、金右衛門殿被仰渡候

御中間類焼御届

覚

森川金右衛門

小宮山作右衛門組
御中間　弐　人

小林五兵衛組
同断　四　人

神谷兵太夫組
同断　三　人

右者昨七日夜四ツ半時頃本郷丸山台町より出火ニ而居宅類焼仕候ニ付御届申上候、以上

丑十一月八日

御中間頭
三　名

御中間類焼之者名面

覚

小宮山作右衛門組
御中間
山田富蔵
滝野佐次郎

小林五兵衛組
同断
山本作次郎
山本作市
浦部兵次郎
秋元直三郎

神谷兵太夫組
同断
松坂藤次郎
松坂金次郎
山崎孫三郎

右者昨七日夜四半時頃本郷丸山台町より出火ニ而居宅類焼仕候ニ付休之儀申上候、以上

丑十一月八日

御中間頭
三　名

右十一月八日御当番金右衛門殿江差出候処、即日休之儀定例之通可申渡之旨御同人被仰渡、組方之分者月番組頭太郎吉を以申渡候、尤定例日数三十日

丑十一月十五日

御目付江

御中間
山田富蔵

出火遠慮可被差免候

右十一月十五日近江守殿御渡之旨八十郎殿立合、忠兵衛殿被申渡候事

（ミセケチ）
「（朱書）「五拾三」」

是ハ
書損

西丸御中間目付より学問所勤番江
御役出之儀奉願候書付

月番　成瀬吉右衛門
笹本彦太郎

御中間目付
林八郎次

右学問所勤番被　仰付候

右都合四通丑十一月九日西丸月番彦太郎殿江差出ス、尤御筆頭作左衛門殿江口上ニ而申上候上ニ而差出候事」

（朱書）
「五十三」
「五拾四」
文化十四丑年
丑十一月十二日
以書付奉願候
一、私妻叔父武州宗岡村百性権九郎与申者、私方ニ一両日逗留仕罷在、当月三日他出仕罷帰り不申候ニ付所々相尋候得共行衛見当り不申候処、鍛冶橋御門外町屋前晒札有之候ニ付早速罷越見届候処、右権九郎ニ相違無御座候間引取申度奉存候、此段奉伺候、以上
十一月十二日
永井松之助　印
岩崎金八　印
神谷兵太夫殿

覚
神谷兵太夫組
御中間
永井松之助
右松之助妻之叔父武州宗岡村百性権九郎与申者、松之助方江一両日逗留仕罷在候内当月三日他出仕罷帰り不申候ニ付、所々相尋候得共行衛相知不申候処、鍛冶橋御門外町屋前ニ而晒ニ相成候者御座候由承り候ニ付、早速罷越見候処右権九郎ニ相違無御座候間、請取候様仕度旨松之助申聞候、依之申上候、以上
十一月十二日
御中間頭
神谷兵太夫
右之通御当番助右衛門殿江御部屋立益を以差出ス

以書付御届申上候
一、私妻叔父武州宗岡村百性権九郎儀、西丸大手御門持場内御堀内江落相果候ニ付、右死骸松平甲斐守家来萩原兵蔵より請取申候、此段御届申上候、以上
十一月十二日
組合　永井松之助　印
岩崎金八　印
神谷兵太夫殿

覚
神谷兵太夫組
御中間
永井松之助
右松之助妻之叔父武州宗岡村百性権九郎儀、西丸大手御門持場内御堀江落相果候ニ付、右死骸松平甲斐守家来より請取候段松之助相届申候、依之申上候、以上
十一月十三日
御中間頭
神谷兵太夫

（朱書）
「五拾五」
文化十四丑年
御中間頭
御小人頭江
真下平六組
御小人
彦八倅
永坂鑑太郎

神谷兵太夫組
御中間
新六弟
河野政次郎

右明廿八日四時学問所江可差越候事
右之趣駿河守殿被仰渡候間申渡候、以上
十一月廿七日　荒川常次郎
牧　助右衛門

右書面御下ケニ付組頭を以新六江申渡、尤政次郎麻上下着用為致新六差添罷出候様申渡、外ニ組頭等者不差出候事
駿河守殿御渡

銀　三枚　河野政次郎
素読出情ニ付銀子被下之

右之通御書付を以常次郎殿・助右衛門殿於学問所被仰渡頂戴仕候間、廿八日新六・政次郎同道罷出申聞候事、右ニ付翌廿九日為御礼廻両　御丸若年寄衆不残幷御用番御老中備中守殿　西丸御老中能登守殿江相越、御懸り常次郎殿・助右衛門殿江も相越候、尤右之懸り御徒目付江問合之上相越候事

（朱書）
「五拾六」
文化十四丑年
丑十月
御小人押部屋場所替之儀
奉願候書付　御中間頭
御小人頭

御中間押・御小人押部屋之儀、中之口脇板塀内壱間ニ弐間半差掛ケ屋根ニ而有之候処　御成之節者弐拾壱人　惣出仕手狭ニ有之、其上平日迚も中之口雪隠後ロニ而夏向者臭気甚敷難義之由、依之部屋替仕度旨兼々申聞相願候得共、部屋之儀ニ付別段申上候事も難仕承置其儘差置候得共、此度御玄関向幷御徒番所勝手裏之方迄御修復御座候ニ付、右御序ニ又々頻ニ相願候間、場所之様子見候而相糺候処実々手狭ニも相見へ、入口前者中之口惣雪隠後ロ掃除口ニ而何様一円小用所ニも相成困り入候場所ニ御座候、依之可相成儀ニ御座候ハヽ、右御修覆之御序ニ別紙絵図面之通部屋場所替被成下候様仕度奉願候、以上
丑十月　御中間頭
御小人頭

右壱通絵図面添十月十四日次兵衛殿江差出、御懸り江御談可被成旨被仰聞候

（朱書）
「五拾七」
文政元寅年
寅二月
元御中間江守覚太夫上り地
之内家作之儀申上候書付　月番　土屋長三郎
石谷周防守

覚
本郷丸山菊坂町
九拾五坪余　鈴木半十郎組
御中間目付
矢村繁八郎

享和三亥年十一月元御中間相勤候江守覚太夫江戸十里四方追放被　仰付拝領地面上り地ニ相成候処、大縄屋敷之儀ニ付去丑年七月元組江御返し被下候間、右繁八郎へ地面引替相渡候、覚太夫

追放以前町会所御貸附金拝借返納残り御座候ニ付繁八郎引受させ、地代店賃を以当寅正月迄返納皆済為仕候、然ル所覚太夫建置候家作三間ニ四間九尺四方土蔵附・同三間半四方・六間ニ弐間半之長屋有之闕所ニも可相成候得共、大縄屋敷之儀先達而被仰渡も御座候間、右家作繁八郎江被下置候様仕度奉願候、以上

御中間頭
寅二月　鈴木半十郎

寅二月六日御扣とも三通・例書弐通添小札附周防守殿江差出、翌七日願之通駿河守殿より次左衛門殿被仰渡候ニ付申渡候

右例書

例書

御小人
金指藤作

右藤作儀町会所金拝借仕罷在、寛政十二申年三月出奔仕拝領屋敷上り地ニ相成、大縄屋敷ニ付同年五月元組江御返被下、相川幸助江地面引替相渡会所金返納引受、皆済之節右藤作建置候家作幸助江被下置候様享和二戌年二月奉願候処、同三月願之通被仰渡候

（朱書）
「五拾八」

文政元寅年

覚

鈴木半十郎組
御中間
小宮山佐太郎

右佐太郎母方親類下谷藁店ニ罷在候浅草御蔵同心奥村孫右衛門先達而大火之節類焼ニ付小屋懸ケ等手伝として罷越候節、去月廿七日湯島天神下家主〔　〕店文蔵与申湯屋江入湯罷越、二階二番之戸棚江衣類・大小入置候処紛失之品

刀　大小　一腰

一、身　長サ弐尺程、無銘
一、鍔　鉄四角、赤銅ふくりん
一、柄糸　黒
一、鮫　白
一、縁　鉄無地
一、頭　角黒塗
一、切羽・鎺　真鍮
一、目貫　不相分
一、鞘　黒塗虫喰・鐺舟底
一、下緒　駿河打黒

脇差

一、身　長サ壱尺五寸程、無銘
一、鍔　銅、青海波彫
一、柄糸　黒
一、鮫　白
一、縁　鉄
一、切羽・鎺　真鍮
一、目貫　不相分
一、鞘　黒塗

一、下緒　駿河打黒
一、桟留茶横竪縞　　袷壱ツ
一、（ママ）但裏木綿萌黄、すそ花色木綿、袖口花色紗綾
一、八丈縞花色帯
一、革鼻紙入、裏黒八丈　　壱ツ
　此外下帯、雪踏共
右之通御座候、尤町触等者不相願由佐太郎届申聞候、依之御届申
上置候、以上
　寅四月　　御中間頭
　　鈴木半十郎

（朱書）
「五拾九」
文政元寅年
　寅九月二日志村十次郎より中務殿江差出
　　覚
御中間惣人数　五百五拾五人
　内　当時明キ　七人
一、御中間組頭　　拾　人
一、御供組頭　　五　人
一、御籏指之者　　五拾五人
一、御中間目付　　五拾人
一、御中間押　　拾三人
一、御持鎗之者　　拾八人
一、御長屋御門番　　弐拾壱人
一、新土戸番　　八　人
一、大奥塀切土戸番　　六　人
一、同御台所前御門番　　拾壱人
　内二丸御広敷兼勤ニ付過人　三人
一、同裏締戸番　　拾壱人
　右同断
一、御太鼓櫓下土戸番　　六　人
一、二丸御長屋御門番　　六　人
一、同御台所脇御長屋御門番　　六　人
一、野方御使之者　　拾九人
一、御馬髪巻役　　四　人
一、御厩定番之者　　八拾人
一、御扶持賄役之者　　拾　人
一、昼番之者　　人数不同当時六拾壱人
一、書役之者　　八　人
一、触番之者　　人数不同当時六拾五人
西丸
一、御中間目付　　拾八人
一、御持鑓之者　　拾三人
一、御長屋御門番　　御本丸より兼勤
一、御納戸口番　　六　人
一、御台所前御門番　　六　人
一、奥表仕切土戸番　　六　人

一、御広敷御長屋御門番　六人
一、同裏締戸番　六人
一、野方御使之者　六人
右之通御座候、以上
寅八月　御中間頭
〆五百四拾人

（朱書）「六拾」

文化十二亥年
亥正月廿九日三郎右衛門殿被遣候旨ニ而当番所より相廻り候ニ付
承付返上
「御目付衆　柳生主膳正　肥田豊後守」
紅葉山両山定式　御成幷駒場其外川筋等都而遠　御成之節、一ケ度ニ而御入用凡何程懸り可申哉　御成之御場所一ケ度分御認分ケ、凡ニ而宜候間早々被差越候様致度此段及御掛合候
亥正月

覚

駒場野
御成之節　在方出役之者
一、銀弐拾八匁八分八厘五毛　御手当
但御前日村方取調之者弐人・廻状持参之者四人・御当日出役八人都合拾四人、壱人ニ付御手当銀弐匁宛、筆紙代八分八厘五毛

浜御庭
御成之節
一、銀六匁八分八厘五毛　右同断
但廻状持参之者壱人・御当日出役弐人都合三人、筆紙代共前同断
遠　御成之節
一、銀四拾八匁八分八厘五毛　右同断　△
但村方取調弐人・廻状持参之者八人・御当日出役拾四人都合弐拾四人、筆紙代共前同断
右者遠　御成之節御入用受取高一ケ度分、凡書面之通御座候、且紅葉山両山　御成之節御入用受取候義無御座候、依之申上候、以上
亥二月　御中間頭　御小人頭
△「本文遠　御成之儀、御道筋幷御場之御最寄ニ而格別出役人数多少御座候間、凡中分之ケ所を以取調申候」
右壱通二月五日杉崎惣兵衛を以差出候処、濡御手当請取方をも取調差出候様同人申聞候ニ付左之通差出ス

紅葉山両山御定式　御成幷駒場野・川筋其外遠　御成雨天之節、濡御手当金請取候凡高
紅葉山江御装束ニ而　御参詣之節　御中間方
一、合銀弐貫四百八拾弐匁五分程　但六拾目替
内
銀八拾弐匁　茶縮緬裕羽織壱ツ

銀九拾匁　綾縞小袖表裏代　御中間御供組頭　壱　人
銀六拾七匁五分　綿代　御先練　御中間　七　人　○
銀五百四拾弐匁五分　熨斗目七ツ表裏代
銀四百七拾弐匁五分　綿代
但綿代者金ニ而受取申候
○「但御装束　御成ニ而無之候節者本文御先練相除申候
銀八百拾匁　黒加賀絹袷羽織弐拾七　御中間目付　弐拾人　御中間押　七　人
銀四百拾八匁　黒絹単羽織弐拾弐　御先御供御中間　弐拾弐人
上野・増上寺江御装束ニ而　御参詣之節
一、合銀三貫四百三拾八匁五分程　但六拾目替
内
銀八拾弐匁　茶縮緬両面袷羽織壱ツ
銀九拾匁　綾縞小袖表裏代　御中間御供組頭　壱　人
銀六拾七匁五分　綿代　御先練　御中間　七　人△
銀五百四拾弐匁五分　熨斗目七ツ表裏代
銀四百七拾弐匁五分　綿代
但綿代者金ニ而受取申候
△「但御装束　御成ニ而無之候節者本文御先練相除申候
銀壱貫三百弐拾匁　御中間目付　三拾壱人
黒加賀絹袷羽織四拾四　御中間押　拾三人
銀八百六拾四匁　御先・御供幷御馬牽人
黒絹単羽織四拾六　御中間　四拾六人

駒場野江　御成之節
一、合銀七貫四百拾六匁程　但右同断
内
銀四百拾匁　御中間御供組頭　御先幷　共　四　人
茶縮緬両面袷羽織五　御厩附　御供　壱　人
銀壱貫弐百三拾目　御中間目付　弐拾八人
黒加賀絹袷羽織四拾壱　御中間押　拾三人
銀五貫七百七拾六匁　御先・御馬牽人　御供方共　御中間　三百四人△
黒絹単羽織三百四
△「但追鳥狩之節者書面之人数之外弐拾人余も相増申候
川筋　御成之節
一、合銀弐貫三百六拾八匁程　但同断
内
銀百六拾四匁　御中間御供組頭　御先　壱　人　御供　壱　人
茶縮緬両面袷羽織弐
銀壱貫百四拾匁　御中間目付　弐拾五人
黒加賀絹袷羽織三拾八　御中間押　拾三人
銀壱貫六拾四匁　御先・御供幷御馬牽人　御中間　五拾六人
黒絹単羽織　五拾六
但川筋　御成之節水馬　上覧有之候得者御供組頭三人・
牽人御中間百五拾人程相増申候
陸路　御成之節
一、合銀弐貫百九拾九匁程　但同断

内

銀八拾弐匁　　御中間御供組頭
茶縮緬両面袷羽織　壱　　御供　壱　人

銀壱貫百拾匁　　御中間目付　弐拾四人
黒加賀絹袷羽織　三拾七　　御中間押　拾三人

銀壱貫七匁　　御先・御供・御馬牽人
黒絹単羽織　五拾三　　御中間　五拾三人△

△「書面陸路　御成六郷筋或者戸田・志村・中野筋等ニ而
御早召有之候節者、御馬出数ニ寄御供組頭三人幷牽人御
中間弐百余も相増申候」

右之通御座候　御成之度々御中間目付幷御中間人数少々宛々増減
有之候、以上

亥二月　　御中間頭

紅葉山江御装束ニ而

御参詣之節濡御手当袷ニ而受取候得者

合銀凡壱貫九百四拾弐匁五分程

同断御平生之　御参詣之節

同凡壱貫四百匁程

両山江御装束　御成之節袷ニ而濡御手当受取候得者

合銀凡弐貫八百壱匁程

同断御平生之　御参詣之節

同凡弐貫三百三拾八匁五分程

右之通合銀凡高ニ而御座候、以上

三月　　御中間方

（ミセケチ）
「（朱書）「六拾壱」

文化十二亥年

亥二月御扣共三通御小人頭より懸り江差出

「駿河守殿　　（朱書）「書損　除」　彦坂三太夫
西丸御用　　須田与左衛門
臨時
御細工所江御断

覚

一、茶縮緬両面袷羽織　壱ツ　　御使組頭　壱　人
但紐共

一、黒加賀絹袷羽織　弐拾壱　　御中間目付　八　人
御小人目付　八　人
御中間押　弐　人
御小人押　三　人

一、黒絹単羽織　六拾壱　　御中間　拾九人
御小人　四拾弐人

一、いろ　十弐　　御長刀役　弐　人
御小道具　十　人

右者　瑞芳院様御葬送御用ニ付書面之通請取申度奉存候、御細
工所江御断被仰渡可被下候、以上

亥二月　　御中間頭
御小人頭」

（朱書）
「六十壱」
「六拾弐」

文化十二亥年

亥四月六日御懸り監物殿江御部屋坊主を以差出ス

摂津守殿
臨時
御納戸江御断
覚

村上監物

一、熨斗目袷　弐拾三

御先練　御中間　七人
御小人　拾五人
亀井坊　壱人

一、綾縞袷　八ツ

御中間組頭　壱人
御小人組頭　弐人
御日傘持　壱人
御草履取　三人
御参内傘　壱人

一、麻上下　弐具

御日傘指　壱人
御草履取　壱人

一、素袍袴・しゆす脚半

亀井坊　壱人

右者於日光山　御法会ニ付、来ル十七日紅葉山　御宮江被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

亥四月

御中間頭
御小人頭

亥四月六日前同断

摂津守殿
臨時
御細工所江御断
覚

村上監物

一、茶縮緬袷羽織　三ツ

御中間組頭　壱人
御小人組頭　弐人

一、黒加賀絹袷羽織　五拾

御中間目付　拾八人
御小人目付　拾九人
御中間押　五人
御小人押　五人
御玄関番　三人

一、黒絹単羽織　八拾九

御中間　拾人
御小人　七拾九人

右同文言之内御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

亥四月

御中間頭
御小人頭

亥四月六日差出ス

摂津守殿
左兵衛佐殿

西丸御用
臨時
西丸御納戸江御断
覚

月番　本多作左衛門
夏目次郎左衛門

一、熨斗目袷　廿三

御先練　御中間　七人
御小人　十五人
亀井坊　壱人

一、綾縞袷　八ツ

御中間組頭　壱人
御使組頭　弐人
御日傘持　壱人
御草履取　三人
御参内傘持　壱人
御日傘指　壱人
御草履取　壱人

一、麻上下　弐具

亀井坊　壱人

一、素袍袴・しゆす脚半

右者於日光山　御法会ニ付、来ル十七日紅葉山　御宮江　大納言

様被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

亥四月　　御中間頭
　　御小人頭

摂津守殿
左兵衛佐殿
西丸御用
臨時
御細工所江御断　　本多作左衛門
　　夏目次郎左衛門

覚

一、茶縮緬袷羽織　三ツ　　御中間組頭　壱人
　　御使組頭　弐人
一、黒加賀絹袷羽織　三拾六　　御中間目付　拾壱人
　　御小人目付　拾弐人
一、黒絹単羽織　七拾八　　御中間押　五人
　　御小人押　五人
　　御玄関番　三人
右同文言　御細工所江御断被仰渡可被下候、以上　　御中間　拾壱人
　　御小人　六拾七人
亥四月　　御中間頭
　　御小人頭

例書

明和二酉年四月十七日於日光山百五拾回　御神忌ニ付、紅葉山　御宮江被遊　御参詣候ニ付着物請取申候
右之通御座候、以上
亥四月

（朱書）
「此書面組頭より差出候ニ付留置、御目付衆江者差出不申候事」

明和二酉年四月十七日
紅葉山　御参詣之節御納戸請取物覚

一、麻上下　壱具　　御日傘役　壱人
　　御使組頭　弐人
　　御供組頭　壱人
　　御草履取　弐人
一、綾島　七ツ　　御日傘役　壱人
　　御参内傘　壱人
一、熨斗目　　御中間　七人
　　御小人　拾五人
一、茶縮緬両面袷羽織　　御供組頭　壱人
　　御使組頭　弐人
一、袷羽織　三十七　　御小人目付　廿七人
　　御小人押　拾人
一、単羽織　七拾弐　　御中間
　　御小人
一、熨斗目
　　素袍袴・しゆす脚半　　亀井坊　壱人
以上

（朱書）
「六拾三」

文化十二亥年

亥十二月十一日御扣共三通御月番江御部屋を以差出ス、翌子正月十二日願済

御中間類焼拝借金奉願候書付　　月番　間宮諸左衛門
　　筒井佐次右衛門

覚

御切米弐拾俵

末次佐吉組
御中間
水野忠五郎

右者文化八未年二月十二日本郷菊坂台町より出火ニ而類焼、又候当月八日本郷金助町より出火ニ而類焼、五ケ年之間両度類焼仕甚難義仕候ニ付、何卒拝借金被　仰付被下置候様奉願候、以上

亥十二月

御中間頭
末次佐吉
小宮山作右衛門
小林五兵衛

十二月廿三日隼人正殿一雲を以御下ケ、同廿五日下ケ札いたし立円を以返上

御目付衆　柳生主膳正

此間御進達有之候御中間水野忠五郎両度類焼拝借金願之儀、御勘定所江御下ケ被成候ニ付取調候処、右者両度共自分家作ニ而類焼致候哉、又者兄弟同居ニ而類焼致候歟、或者他家江養子ニ罷越勝手ニ付実父方江同居いたし罷在候歟、其外借宅等之否御糺之上被御申聞候様致度此段及御掛合候、以上

亥十二月

御書面水野忠五郎両度共自分家作ニ而類焼仕、同居・借宅等ニ而者無御座候

亥十二月

御中間頭
末次佐吉

末次佐吉組
御中間
水野忠五郎

右両度類焼ニ付拝借願

御附札
願之通拝借被　仰付候、尤御勘定奉行江可被談候

右子正月十二日近江守殿被仰渡候段、三郎右衛門殿御立合山城守殿被御申渡候事

請取申拝借金之事

金三両　御切米弐拾俵

末次佐吉組
御中間
水野忠五郎

右者文化八未年二月十二日本郷菊坂台町より出火ニ而類焼仕、又候去亥十二月八日本郷金助町より出火ニ而五ケ年之内両度類焼仕候ニ付、為拝借金書面之通請取申候、返納之儀者来丑年より巳年迄五ケ年賦元方御金蔵江上納皆済之節、納札を以此手形引替可申候、仍如件

文化十三子年正月

御中間頭
末次佐吉　印

堀内小膳殿
西井孫太夫殿
西　新太郎殿
和田源助殿

右之通相違無御座候、以上

村上監物　印
牧　助右衛門　印

表書之金三両被相渡、返納之儀者来丑年より巳年迄五ケ年賦返納皆済之節、納札を以此手形引替可被相返候、断者本文有之候、

以上

子正月

館　忠四郎　印

退出

米　嘉太夫

勝　桓兵衛　印

御用ニ付無印形

岸　彦十郎

篠　十兵衛　印

公事方無印形

榊　主計頭

公事方無印形

曲　甲斐守

柳　主膳正　印

元方御金奉行衆

右手形上包江如斯張紙いたし差越ス

「明朔日渡りニ付、今夕元方御金蔵奉行月番西
新太郎方江写持参、受取方等之儀問合之事
正月晦日　御勘定所」

右手形御勘定所聞合正月廿五日御目付御判受、翌日御勘定組頭米倉四郎左衛門江遣ス、同晦日裏判済御勘定所より受取賄役呼寄相渡、二月朔日元方御金蔵より御金受取、月番組頭宅おゐて賄役立合せ忠五郎江為相渡候事

（朱書）
「六拾四」

文化十三子年

子二月二日隼人正殿江川村助左衛門を以差出ス

新土戸番
御中間八人内
弐人勤番

一、御門明ケ六時開暮六時閉、潜り戸者夜中明ケ置申候、尤玄猪・御謡初并夜中出火ニ而御老中方御登　城有之候得者御門明ケ置申候

大奥塀仕切土戸番
御中間六人内
弐人勤番

一、御門明ケ六時開キ夕七時閉、潜り戸者夜中明ケ置申候、其外右同断

御太鼓櫓下土戸番
九人之内御小人方
より三人打込勤
三人勤番

一、御門明ケ六時開夕七時御太鼓打候而締、潜り戸者明ケ置九時より潜り締置申候

右之通御座候、以上

子二月

御中間頭
御小人頭

（朱書）
「六拾五」

文化十三子年

子四月四日掛り江差出ス

「駿河守殿
臨時
御納戸江御断
覚」

彦坂三太夫
村上監物

一、熨斗目袷　七ツ

御先練御中間
七　人

一、綾島袷　壱ツ　　御中間御供組頭　壱人

右者此度　御転任ニ付紅葉山　御宮幷上野・増上寺　御霊屋江被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御納戸江被仰渡可被下候、以上

子四月　　御中間頭　末次佐吉
小宮山作右衛門
小林五兵衛

駿河守殿
臨時　御細工所江御断
覚

一、茶縮緬袷羽織　壱ツ　　彦坂三太夫
但紐共　　村上監物

一、黒加賀絹袷羽織　四拾弐　　御中間御供組頭　壱人

一、黒絹単羽織　三拾六　　御中間目付　三拾四人

前同文言之内御細工所江被仰渡可被下候、以上　　御中間押　八人

子四月　　御中間頭　右三名　　御中間　三拾六人

駿河守殿
左兵衛佐殿
西丸御用
臨時

西丸御納戸江御断

一、駄斗目袷　七ツ　　月番　本多作左衛門
覚　　駒井

一、綾島袷　壱ツ　　御先練御中間　七人
御中間御供組頭　十七人

右者此度　右大将様　御兼任ニ付紅葉山　御宮幷惣　御霊屋江被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御納戸江被仰渡可被下候、以上　　御中間頭　前三名

子四月

駿河守殿
左兵衛佐殿
西丸御用
臨時　御細工所江御断
覚

一、茶縮緬袷羽織　壱　　月番　本多作左衛門
駒井（但馬守カ）

一、黒加賀絹袷羽織　弐拾　　御中間御供組頭　壱人
西丸御中間目付　拾五人
御中間押　五人

一、黒絹単羽織　拾壱　　御中間　拾壱人

右同文言　御細工所江被仰渡可被下候、以上　　御中間頭　前三名

子四月

駿河守殿
左兵衛佐殿
西丸御用
臨時
御細工所江御断
覚

月番　本多作左衛門
駒井

一、黒加賀絹袷羽織　拾六

御中間目付　八　人
御小人目付　八　人

一、黒絹単羽織　弐拾六

御小人　弐拾六人

右者此度　御兼任ニ付　右大将様紅葉山　惣御霊屋江　御参詣之節御先出役之者共江為着候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

（朱書）
「本文御先出役之儀　公方様　右大将様　御同参之節者　御本丸勤之者兼候ニ付、先達而御供方一同羽織請取之節相除申上候処御一方　御参詣之節者右出役西丸勤より差出候ニ付猶又御断申上候」

以上

子四月

御中間頭
御小人頭

子五月九日御掛り監物殿江御扣共三通出ス

駿河守殿
臨時
御納戸江御断
覚

村上監物

一、染帷子　八ツ

御中間御供組頭　壱　人
御先練御中間　七　人

右者此度　御転任ニ付、増上寺　御霊屋江被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御納戸江被仰渡可被下候、以上

子五月

御中間頭
末次佐吉
小宮山作左衛門（右）
小林五兵衛

駿河守殿
左兵衛佐殿
西丸御用
臨時
西丸御納戸江御断
覚

月番　中川物左衛門
羽太左京

一、染帷子　八ツ

御中間御供組頭　壱　人
御先練御中間　七　人

右者此度　右大将様　御兼任ニ付、紅葉山　惣御霊屋江被遊御参詣候節為着候ニ付、書面之通受取申度奉存候、御納戸江被仰渡可被下候、以上

子五月

御中間頭
前三名

（朱書）
「六拾六」

文化十四丑年

下野守殿　神原孫之丞
御代官手附之儀ニ付相伺候書付

書面伺之通可申渡旨被仰渡奉承知候

丑十二月廿九日　服部伊賀守
古川山城守

御目付支配無役
小林弥十郎倅
御代官
杉庄兵衛手附出役
小林増五郎
丑三拾八歳

父高拾五俵弐人扶持

右増五郎儀父小林弥十郎野馬方書役相勤候節、寛政八辰年四月部屋住より元御代官萩原弥五兵衛手附出役被　仰付、其後出役替之上当時庄兵衛役所相勤罷在候処、弥十郎義先達而病気ニ付御目付支配無役ニ相成罷在、此度隠居被　仰付増五郎江家督被下候様奉願候旨申聞候間、願之通家督被下候ハ、増五郎義是迄手附出役出精相勤御用弁も宜者ニ御座候間、外並之通手附ニ被仰付候様仕度段庄兵衛相願申候

右之通申聞候間取調候処、増五郎義寛政八辰より当丑迄手附出役弐拾弐ケ年無滞相勤候者之儀ニ付、家督被下候ハ、庄兵衛願之通手附ニ被　仰付、手当之儀者同人江被下候諸入用之内を以相応可相渡旨被仰渡候様仕度奉存候、依之此段奉伺候、以上

丑十一月

右書面文政元寅年正月十九日与左衛門殿隆円を以御下ケ、引渡之儀定例之通取計候様被仰渡候間書面江者承付返上いたし、無役世話役方江申遣右世話役ニ而為取扱候事

（朱書）
「六拾七」

文政元寅年三月十二日駿河守殿御渡、助右衛門殿立合源六郎殿被仰渡

御目付江

御中間
田中直蔵
三橋勝十郎

右松前奉行支配調役下役可被申渡候、勤候内並之通御足高・御足扶持被下役扶持も被下候間、其段も可被申渡候、尤松前奉行可被談候

右両人とも蝦夷地在住ニ付左之通取扱候事

御中間
田中直蔵
三橋勝十郎

右両人共御支配調役下役被　仰付候ニ付御引渡申候事

御中間頭
神谷兵太夫

三月十三日

右書付ニ而翌朝松前奉行支配吟味役荒井平兵衛江引渡、其段御当番金右衛門殿江口上ニ而申上候事

田中直蔵殿
御用向

江府
神谷兵太夫

以切紙致啓達候、然者其御許并三橋勝十郎松前奉行支配調役下役被　仰付候旨、今日別紙之通御書付を以植村駿河守殿被仰渡候段、御目付牧助右衛門殿立合諏訪源六郎殿被申渡候、依之御書付写差進此段申達候、以上

三月十二日　　神谷兵太夫　印

田中直蔵殿

右同文言　其許幷田中直蔵与認

三橋勝十郎殿

右格通封状ニ而封し裏印居、三月十三日荒井平兵衛江相頼差立候事

（朱書）
「六拾八」

文政元寅三月廿八日在方出役之者より銘々頭々江内意申立候趣御筆頭助右衛門殿江申上候処、口上之趣認取差出候様被仰聞候ニ付、向方柳田相番ニ而両名ニ而左之通認御同人江差出ス

去ル廿三日　右大将様六郷筋　御成ニ付在方為御取締、池上村江小宮山作右衛門組御中間真壁忠左衛門出役仕候処、右村名主角左衛門与申もの内々申聞候者、去ル十六日在方御出役之由ニ而野羽織着用被致供之者壱人被召連被相越、近々　右大将様六郷筋　御成ニ付為見廻罷越候段被申述、土足之儘右名主座敷江通り、少々路用差支候由ニ而金子用立呉候様被申聞候ニ付、名前承候処在方出役之者ニ無相違、近々　御成之節者同役之内誰々此辺出役罷越候ニ付、其砌右借用金返済可致旨被申候ニ付南鐐壱片貸遣候段申聞候由、然ル処在方出役之者之内右躰之者者決而無之、定而偽ものニ可有之旨申達、若右近辺ニ而も右様之取計致候哉も難計存相探候処、四ケ村程少々宛偽取候趣忠左衛門幷相役之者共申聞候間此段奉入御聴置候

三月　　神谷兵太夫
柳田玖右衛門

近頃御目付方在方出役之者之由ニ而村々名主・年寄等方江立寄、途中雑用等借受候者有之由風聞有之候、此方共仲ケ間之内右様不正之及談候義者無之筈ニ候間為心得申達候、向後右躰紛敷もの相越候ハヽ、其所ニ留置、早々拙者共之内江可被申聞候

四月　　御目付方在方出役
田中佐左衛門
清水仁平次

追啓右書面之趣村々江可申通候、此廻状披見之上承知之旨村下江致受印追々順達、留村より両人之内江可被相返候、以上

右之通為取締廻状差出度旨在方出役之者申聞候ニ付其通り為取計、右之段御筆頭助右衛門殿江御咄し申上候処、至極宜敷承り置候段被仰聞、勿論右ニ付而者右出役之者も尚更此上取締第一ニ相心得申合、不正之義無之様可致旨被仰聞候間此段も申渡候事

四月十七日

（朱書）
「六拾九」

寅七月廿四日御長屋御門番世話役山本長六持参差出

此度組頭鈴木勘助儀老衰仕役儀　御免之儀願書差上候ニ付、是迄之通御長屋御門番筆頭之者被　仰上候義与奉存候、左候得者梶田徳右衛門筆頭ニ付可被　仰付御義与奉恐察候、右ニ付而者同人跡世話役・本役・助役共夫々可被　仰付御事与奉存候、右之通出来候上ニ而梶田徳右衛門義年来相勤候ニ付、月並・五節句其外不時御礼日之節等罷出相勤度旨申聞候ニ付、何卒右様之節々出

勤仕候様被　仰付被成下候ハヽ、一同難有奉存候、尤台方同役共江も相談候処是又私共同様ニ御座候ニ付、右之趣御聞済被成下候様此段一統奉願上候、以上

寅七月　　御長屋御門番一統

小　五兵衛様
神　兵太夫様

寅八月五日小宮山作右衛門方ニ而差出候旨為心得申越

口上之覚

小宮山作右衛門組
御長屋御門番
梶田徳右衛門

右者此度鈴木勘助跡御中間組頭被　仰付候ニ付内役勤ニ相成候、右ニ付同人義是迄四十八年出精相勤候而勤向取締ニも相成候、依之月並・五節句・不時御礼之節御殿中込合申候節者罷出、制し方行届候様差引等為仕度段御長屋御門番一統相願申候間、右之通可申渡哉、此段御内意奉伺候、以上

寅八月

御中間頭
小宮山作右衛門

小宮山作右衛門組
梶田徳右衛門

右者御長屋御門番より同組御中間組頭被　仰付候処、右御門番年来相勤候ニ付、月並・五節句其外不時御礼日之節等罷出相勤度旨申立候間、台方御門番之方差支之有無相糺候処、一同差支之筋無之、西久保一統奉願候通同様相願候旨申聞候ニ付、其段助右衛門殿江尚又兵太夫よりも申上候処、即日御一同評議之上申立候趣一同承置候間、願之通御礼日等之節出勤為致候様被仰渡候ニ付其段申渡候事

寅八月六日

（朱書）
「七拾　七拾壱与組合」

文政元寅八月廿五日与左衛門殿御下ケ五役承付返上

服部伊賀守
古川山城守

御目付衆

駒場其外川筋等都而遠　御成之節共、一ケ度分御入用　御本丸計ニ而何程ツヽ、　右大将様計　御成之節何程ツヽ、相掛可申哉、御場所壱ケ度ツヽ、御認分凡ニ而宜敷候間、早々被差越候様致度此段及御掛合候

八月

覚

駒場野　御成之節　　在方出役之者
一、銀弐拾八匁八分八厘五毛　　御手当

但御前日村方取調之者弐人・廻状持参之者四人・御当日出役八人都合拾四人、壱人ニ付御手当銀弐匁ツヽ、筆紙代八分八厘五毛

浜御庭　御成之節　　右同断
一、銀六匁八分八厘五毛

但廻状持参之者壱人・御当日出役弐人都合三人、筆紙代共前同断

遠　御成之節

一、銀四拾八匁八分八厘五毛　　右同断　△

但村方取調弐人・廻状持参之者八人・御当日出役拾四人都合

弐拾四人、筆紙代共前同断

△「本文遠　御成之儀、御道筋幷御場之御最寄ニ而格別

出役多少御座候之間、凡中分之ケ所を以取調申候」

（朱書）「右三廉者文化十二亥正月御勘定奉行より懸合有之候節、取調申

上候書面与同様ニ候事」

右者遠　御成之節御入用受取高一ケ度分、凡書面之通御座候、

尤　右大将様　御成之節も右同様ニ而御座候

一、右在方出役之者請取候御蠟燭之儀、前々拾五匁掛之処文化十酉

年四月より拾匁掛ニ相成、左之通当番所より受取申候

浜御庭　御舟之節　弐拾四挺

陸之節　九挺

駒場野　三拾四挺

王子筋　五拾四挺

梅田筋　六拾五挺

亀有筋
小松川筋
目黒筋　六拾弐挺宛

雑司ケ谷筋　四拾四挺

品川筋　六拾挺

六郷筋　九拾挺

中野筋　五拾六挺

荻窪筋　八拾六挺

右者村方取調御前日廻状持参、御当日出役之分共御場所ニ寄出

役人数ニ応書面之通受取申候、尤　右大将様　御成之節ハ拾

五匁掛ケ右員数之通西丸当番所より受取来申候

右之通御座候、以上

寅九月　御中間頭
御小人頭

駒場其外川筋等遠　御成雨天之節、濡御手当金請取凡高

駒場野　御成之節壱ケ度分

凡金百弐拾両余　（朱書）「此内訳委細同文化十二亥二月書上ニ有之、可見合」

川筋　御成之節同断

凡金四拾両余　（朱書）「同」

陸路　御成之節同断

凡金三拾両余　（朱書）「同」

右大将様

駒場野江　御同道ニ而　御成之節同断

凡金弐拾両余

川筋　御成之節同断

凡金四拾両余

陸路　御成之節同断

凡金三拾両余

右者組之者濡御手当金高凡書面之通御座候、尤　御成之御場所御

模様ニ寄其度々増減有之候、且又駒場野追鳥狩幷川筋水馬　上覧
陸路　御成　御早乗等有之候得者出方人数格別相嵩候故、右様
之節者本文金高相増申候
駒場其外川筋等都而遠　御成之節

六時御供揃ニ而　還御夜ニ入候節
一、御蠟燭　中拾匁掛
拾弐挺
六時過御供揃ニ而　還御夜ニ入候節
一、同　同断
六　挺
右者御注進・野方御使之者請取申候
右大将様　御成之節も同様ニ御座候

御成　還御　通御之節
一、御蠟燭　下弐拾目掛
四　挺
御長屋御門江
同
一、同　同　断
新土戸御門江
同
弐　挺
奥表仕切土戸御門江
右三御番所江都合拾挺請取申候、尤短夜之節者建替共弐拾挺請
取申候、通御無之　御成ニ而御門明キ七時之節幷同断　還御夜
ニ入候節
下拾五匁掛ケ建替共
六　挺
御長屋御門江
同断
八　挺
新土戸御門江

一、同　同断
四　挺
奥表仕切土戸御門江
右三御番所江都合拾八挺請取申候
右御注進幷御番所向御蠟燭之儀御挑灯奉行より受取申候
右大将様　御成之節御門明キ七時　還御夜ニ入候節共
一、御蠟燭　下弐拾目掛
弐　挺
西丸御長屋御門江
一、同　同　断
同御納戸口江
一、同　同
四　挺
同御台所前御門江
一、同　同
弐　挺
同奥表仕切土戸御門江
右者西丸当番所より受取申候、尤建切候得者猶又書面之通受取
来申候
右之通御座候、以上
寅九月　御中間頭
右弐通九月十一日当番所杉崎惣兵衛を以上ル

（朱書）
「七拾壱　七拾与組合」
文政元寅十月六日西丸当番所河合儀左衛門より差越承付返却

黒鍬頭
御掃除頭　江
御中間頭
御小人頭

右大将様駒場幷浜其外川筋等都而遠　御成之節、壱ヶ度分御入用何程宛相掛候哉、且御同日　御成之節者　右大将様御分計何程宛掛り候哉、凡高取調認メ分早々可申聞事

十月　　本多作左衛門

（朱書）「右ニ付書上取調、十月十三日西丸当番所組頭堀越又右衛門を以差出ス、右書面之儀在方出役之者受取候蠟燭之廉、前条之通御本丸様分ニハ梅田筋六拾五挺与有之候得共　西丸様分ニ者何故歟右之廉除キ有之、全留メ落歟、且濡御手当金之廉駒場野御同道御成之節、凡金弐拾両余与申廉之抜書ニ是迄　右大将様計駒場野江被為　成、御手当被下候義無御座候与書書載有之、其余者都而前条同年九月十一日ニ差出候書面与同様ニ而、右之内右大将様御分丈ケ取拾ひ認候迄之義ニ付留メ略候事」

（朱書）「七拾弐」

寅十一月　日当番所組頭小沢伝之丞より差越承付返却

御徒目付組頭
火之番組頭
黒鍬頭
御掃除頭　江
御中間頭
御小人頭
御駕籠頭

別紙之通服部伊賀守・古川山城守・村垣淡路守・明楽八郎右衛門・勝桓兵衛より達有之候ニ付、年中筆墨紙其外都而受取物可成丈厚勘弁いたし、減方取調候様可致候、種々手を尽候而も実々減方附不申品も有之候ハヽ、其段委細ニ相認可差出候、尤追々時節柄ニも相成候間取調当月中否可申聞候事

十一月　　牧　助右衛門
内藤隼人正

服部伊賀守
古川山城守
村垣淡路守
明楽八郎右衛門
勝　桓兵衛

当四月改而御倹約被　仰出候ニ付、諸向御入用・減方取調可申上候処未申上無之向も有之候ニ付、右向江者取調之趣早々申上候様可相達旨青　下野守殿・水　出羽守殿被仰渡候ニ付、其御支配向々取扱候御入用之分も減方御取調之趣早々被御申上候様存候、此段御懸合およひ候

寅十月

寅十一月廿九日当番所組頭小沢伝之丞江遣ス、同十二月廿日書面之通御勘定所江御打合相済候間、来正月より受取物弥申立之通相心得候様隼人正殿被仰渡候段竹内源右衛門申聞

当四月改而御倹約被　仰出候ニ付、年中筆墨紙其外都而受取物可成丈厚勘弁仕、減方取調可申上旨被仰渡候ニ付左ニ申上候

暮定式受取物之内

御本丸御用　　御中間
一、熨斗目小袖　七ツ　　七　人
一、綾島小袖　壱ツ　　御中間御供組頭　壱　人

同断
西丸御用
一、右同断

右者去ル申年御倹約被　仰出、御年限中両御丸共半分御品半分代金ニ而受取、其後引続只今以同様受取候ニ付、此上減方無御座其外組之者受取候着物之儀相減候廉無御座候

一、青縁取　　六　枚
一、莚　　拾　枚

右者毎暮御長屋御門御番所江引替受取候処、去ル申年御倹約被　仰出候節より青縁取六枚之内弐枚、莚拾枚之内四枚相減受取、御年限相立本文之通受取候得共、猶又御倹約御年限中前書之通相減受取候様可仕候

一、御蠟燭　　下拾五匁掛　拾八挺

右者通御無之　御成ニ而御門明七時之節幷同断　還御夜ニ入候節、御長屋御門・新土戸御門・奥表仕切土戸御門右三ヶ所江前々弐拾目掛ケ受取候処、去ル申年御倹約被　仰出候節より下拾五匁掛ケニ相成、只今以本文之通相減候儘受取候ニ付、此上減方無御座候

一、新土戸御番所
一、二丸御長屋御門
一、同御台所脇御長屋御門
一、西丸御長屋御門
一、同御台所前御番所
一、同御納戸口前御番所
一、同奥表仕切御門
一、同御広敷御長屋御門

右八ヶ所江受取候御用油之儀、先年より追々御減有之、寛政元酉年御減之節より九月より正月まで一夜ニ付七勺五才ツ、、二月より八月迄六勺五才ツ、ニ相成候処、去ル申年御倹約被　仰出候節より、御年限中夜分長短ニ不拘五才ツ、相減受取候処、御年限相立候而も諸品位下ケ之趣ニ准、升数相減候儘居置候様去丑年三月御勘定所より懸合有之候得共全くハ引足り不申候処、去ル申年格別之被仰渡も御座候義ニ付、灯方厚く勘弁為仕為御用立候儀ニ而兼々引足不申候趣勤番之者共申立候得共、御年限中別段難申立候間猶精々申渡置候義ニ付、申年以前之通五才宛増相渡候様仕度段申立、去丑年より申年以前之通請取候義ニ御座候間、此上猶又相減候而者御差支之程も難計旨勤番之者共申立候間減方難申渡奉存候

右者去ル申年御倹約被　仰出候節、相減候廉書面之外無御座候、尤此後御倹約中本文青縁取・莚之儀者相減、其外都而受取物之内相減候品無御座候、依之申上候、以上

寅十一月　　御中間頭

「三拾六」挿入図
御長屋御門御番所絵図

「四拾八」挿入図